

- ・はしがき
- ・序論
- ・目次
- ・稲賀繁美「『蜘蛛の巣』状モデルの学術的有効性に関する学説史的考察—ティム・インゴルド『生きていること 動く、知る、記述する』を参照しつつ」
- ・成果概要：本論集の目論見と論文集の構成
- ・あとがき

- ・欧文目次
- ・欧文要旨
- ・注 序論
- ・注 稲賀繁美
- ・编者紹介
- ・奥付

はしがき

蜘蛛の巣上の無明…電子情報網生態系下の身心知の将来

研究代表者 稲賀繁美

吾々は今、電子情報のネット網という「蜘蛛の巣」に囚われている。それはすべてに連絡できるという幻想と裏腹に、「ネット中毒」によって感覚を麻痺させ、「獲物」を雁字搦めに拘束する。そこに囚われた主体は、実際には「無明」に包まれている。それは「ネットカルマ」(佐々木閑)とも命名された。かつては脳に託された知識の蓄積も「雲上」の外部装置に委託され、教育において次世代に継承すべき知識内容も、いまや自明性を喪失している。その一方で、身体を介した実践知は、人工頭脳やロボット技術による置換がきわめて困難な領域として注目されるに至っている。実際、文書化された教科書の手引では伝達できない領域が、身体に埋め込まれる知にほかならない。本研究では「雲」cloudにも譲渡できず、蜘蛛の巣の裡に取り込まれた身心の裡に「無明」として残された領域をどう扱うか、その将来像を模索したい。この課題には文化横断的な国際的知見、学際的な経験交流、実践を無視しない総合性が要請される。

Foreword

Avidya on the Spider's Web: Toward the Future of Somatic Experience under the Ecology of Social Network System

We are now trapped in the “spider’s web” of the World Wide Web. The flip side of the illusion that we are linked to everywhere is the paralysis to our senses caused by our own dependence on the Internet, where we are bound hand and foot as “prey.” We, who are thus trapped, are wrapped in ignorance/illusion(*avidya*), a state described by Sasaki Shizuka, scholar of Indian Buddhism, as “net karma.” Accumulation of knowledge, which was once entrusted to the brain, is now entrusted to external devices “in the Cloud,” and the content of knowledge to be transmitted to younger generations as education seems no longer to be accepted as self-evident.

Meanwhile, attention is being focused on the area of practical knowledge acquired through physical activity as being extremely difficult to replace by artificial intelligence or robot technology. Such knowledge is embedded in the body and cannot be transmitted through textbook-like guidance. This study seeks to provide a future vision for dealing with the areas of knowledge that cannot be entrusted to the “Cloud” and are left as the “*avidya*” within the body and mind caught up in the spider’s web. This task requires cross-cultural, international insight and interdisciplinary exchange of experience, as well as a comprehensiveness that does not ignore the practical.

前言

蜘蛛网上的无明：在电子信息网络生态中探索身心知的未来

如今，我们被电子信息网络这个“蜘蛛网”所局限，因为它既给了你可以联络到任何事物的幻想，同时反过来又以“网络中毒”的形式麻痹你的感觉，将“猎物”紧紧地束缚住。被局限住的主体，实际上被“无明”所裹挟。它也曾被佐佐木闲命名为“网络果报”。曾依赖于大脑的知识储备，如今被托付于“云上”的外部装置，在教育中本应传承给下一代的知识内容，在当下也丧失了其自明性。而另一方面，作为极难以人工大脑和机器人技术取代的领域，以身体为媒介的实践知备受瞩目。事实上，用文书化、教科书式的指南难以传达的领域，唯有被嵌入身体的知识。本研究旨在摸索如何处理那些无法交给“云（cloud）”的、在嵌入蜘蛛网内的身心里作为“无明”所残留的领域，摸索其未来的愿景。本课题需要有跨文化的国际性知见，跨学科的经验交流，以及重视实践的综合性。

(戦晓梅・訳)

序論 本論文集の構想について

Avidya on the Spider's Web 蜘蛛の巣上の無明

——電子の網目へと仮想化する蜘蛛手の街にて

編者 稲賀繁美

アステイオン ástáion は、「都市」に由来する古代ギリシア語形容詞の中性形に淵源し、転じて「都会風の」さらに「洗練された」といった意味へと派生する。ところが二〇世紀末以降の急速な電子技術の展開とともに、仮想現実 virtual reality が現実の都市空間を凌駕して、惑星地球の表層を覆い尽くすに至った。漢語ならば「経世済民」に依拠し、ギリシア語でも「家政」oikosに立脚していたはずの「実体経済」も、いまや金融の虚構の網の目に捉えられ、そのなかに埋没した。坪内祐三は『右であれ左であれ、思想はネットでは伝わらない。』（二〇一八）との遺言を残したが、元来 Social Network System だったはずの SNS は、思想の彫琢や都市の洗練に結びつく道具となるどころか、この国では皮肉にも「会員制交際サイト」「Social Network Service へと変質を遂げた。

地球表層を覆う電子情報網の記号交換は、人間の認知能力を遙かに凌駕する速度と質量とを獲得したが、それに伴い、書籍を媒体とした流通網は急速に衰退した。流通効率の向上だけが自己目的化し、「余計」な雑音の除去が「善」と短絡する。都市生活は「鋭く感じ、柔らかく考える」多様性を許す場であることをやめ、些細な規則の遵守に拘り、それに抵触する事態に、理由も問わず過敏な警告を発する相互監視体制を構築した——あたかもそれが万民の期待で

もあつたかのように。侃々諤々のアゴラ Agora から成長を遂げたことされる民主的 democratic 論壇は Twitter とやらの
 吹きの中へ解体を遂げ、「オタク」の「お友達」、仲間うちの党派ごとに分岐して硬直した約束事の教条が、鋭敏な批
 判感覚を鈍磨させる。学術界の「真実の探究」も今や post-truth の情性の反復と仮想現実という想像界 Imaginaire へ
 の逃避へと劣化を遂げた。

「都市の空気は自由にする」 Stadluft macht frei とは、一九世紀中葉にドイツ語圏の法学者が発明した表現とされる。
 だが過去にも交易都市を定期的に襲ってきた疫病は、今世紀になってあらたな pandemic を地球規模で蔓延させた。
 Pan-demic は語源的に「凡て」の「民」を意味するが、「万民」を差別なく襲うその「コロナ禍」は、人類に突きつ
 ける——電子情報網による地球表層制覇の「現実」が何を意味していたか、その「生物学的」な真実を。もとより自
 由交易は、ウイルスを瞬く間に世界中に撒き散らすために最適な環境。そして統御不能な病原体は、ヒトの営みが
 「新人世」 Anthropocene に築き上げた地球環境のみならず、仮想現実界にまでも、「自由」自在に増殖し、「都市的洗
 練」の内奥に浸潤を遂げる。——短く見積もっても、それがいわゆる「大航海時代」以降五百年の世界史構築の現実
 ではなかったか。梅棹忠夫の「生態史観」を川勝平太は「海洋史観」へと塗り替えたが、その実態は無法者の跳梁跋
 扈と伝染病の世界的拡散、私見を弄するなら「海賊史観」と呼ぶに相応しい。その先で、現今の電子情報網環境は
 「蜘蛛の巣」の比喩を頼りに、生態学的に再考するに値する。

◆ネット世界(第二部扉参照)は今や憎悪や悪意、虚偽や怨恨の網に囚われた地球＝人類の姿の写し鏡。だがネットに
 よるこの戯画は、蜘蛛を害虫と決めつける先入観に囚われている。思えば、かつて豪州由来の毒蜘蛛を外来危険生物
 として水際駆除する騒ぎが発生した。折からオウム真理教事件が発生していたが、科学哲学者の三浦俊彦は、毒蜘蛛
 退治と「邪教」一掃を訴える世論が、ほかならぬカルト自身の「聖域浄化」思想の二の舞いを演じていると批判した。
 セアカゴケグモは今何処? ◆捕食者としての雌蜘蛛(図1)といえ、映画化もされて話題となった、マヌエル・プ
 イグの小説『蜘蛛女のキス』が思い出される。繁殖行為の後、雄蜘蛛は多く雌蜘蛛の餌食となるが、小説は収監中の
 同性愛者の物語だった。carnaval カニヅアルは謝肉祭だが、(カリブ海＝ラテン・アメリカ幻想として) cannibalism
 食人とも通じる(図1)。

◆和服の意匠にも蜘蛛の巣が知られる。上村松園『焰』(一九一八)が有名だろうか(図2)。紫式部『源氏物語』葵
 の巻の一場面に由来するが、葵上に対する六条御息所の生霊の嫉妬は、精神病理の真実を穿ち、そこには「宿命の
 女」femme fatale の影も漂う。悪霊退散の加持祈禱に用いられた芥子の悪臭が、あたかも衣の文様の蜘蛛の巣に付着
 して伝播したかのような妖気が、画面に横溢する。◆政治亡命者の心象風景(図3)にも蜘蛛が登場する。ヴィクト
 ル・ユーゴーが避難先のルクセンブルクはヴィアンデンで成した水彩だが、「蜘蛛の巣」ごしの、囚われの窓の彼方
 の青空が「雲」の自由へと視線を誘う。◆脳内自生の牢獄としての蜘蛛の巣(図4)は、筆者も親しいフランスの生
 物学者・詩人のハイカイから。「迷妄の網めぐらして待つ蜘蛛の餌食は誰ぞ 紡ぎ手汝は」(拙訳)。自らの脳髓が編
 み上げた罫に閉じ込められた実存の不条理……。ここで思い出されるのが、◆ウロボロスのなかの迷妄(図5)。自
 らの尾を噛むナーガ龍が永劫回帰の円環世界を枠付け、その中にブラフマンに仮託された蜘蛛が迷妄「マヤー」の
 網を張り巡らす。『ムンダカ・ウパニシャッド』に見られる古くからの形象だが、その電子版こそ佐々木閑師の呼ぶ
 「ネットカルマ」。ネットに一度漏洩した「業」は永劫に消滅せず、無限に拡散を続け、世界中に災厄をもたらす。
 ◆だが仏典では蜘蛛は悪者とは限らない。芥川龍之介の「蜘蛛の糸」(図6)は鈴木大拙が和訳した、ポール・ケイ
 ラス「因果の小車」の翻案(図7)。救いの糸が切れたのは利他を忘れた強欲の為、との教訓譚に変貌している。
 ◆一方、蜘蛛の糸の上に連なって朝日を受け、震えながら輝く水滴に感動したのが、小泉八雲(こいずみ) Latéidie Hearn
 (図8)。この帰化作家はそこに華嚴の宇宙の具現を見たはずだ。個々の水滴に全世界が縮約され、またひとつの水滴
 世界が他のすべての水滴に映り込む。その融通無礙な相照相映の荘嚴は、粘性性ある蜘蛛の糸に水滴が析出するから
 こそ、束の間実現される。

ギリシア神話のアラクネ、女神アテーネ(あるいはパラス)と技量を競った増長ゆえに、蜘蛛の姿に貶められた機
 織り女の化身 avatar など、蜘蛛の織糸を巡る連想・夢想は、人類の記憶の総体に波及しつつ、際限なく広がってゆく。
 ◆偶然的運命の糸を可視化してみせる塩田千春の『夢のあと』(図8)ほかの作品や、Hollywood 映画 Spider man 連
 作(図9)などへの言及は、若い世代の読者に託したい。metavers 滅多婆果? 「メタバース」:「婆」の由来は「湯
 婆婆」[「錢婆」を想起されたし]に通じる地獄の釜の底が抜け、特異点 Singularity Point の到来を目前にした人類にと
 って、web 上の無明からの解脱は、今や焦眉の課題なのだから。

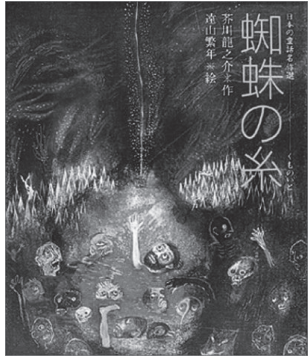


図6 芥川龍之介「蜘蛛の糸」
遠山繁年 表紙 偕成社、1994年

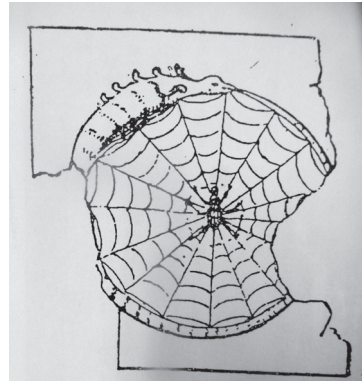


図5 通称 Maya Spider と呼ばれる図像（出典不詳）
自分の尾を噛む蛇・ウロボロスの形態をとったナーガ龍。この龍によって囲まれた空間に蜘蛛の巣が張り巡らされる。中心の蜘蛛はプラフマンに仮託され、それが創り出す迷妄すなわちマヤーとしての輪廻転生する世界に、我々は囚われている。「ネット・カルマ」の隠喩の原像をなす図像。すでに『ムンダカ・ウパニシャッド』に蜘蛛の比喻は見え、不滅と無常の譬えとして18世紀には、西欧社会にも伝播する。本図は西欧の刊行物に掲載された複製図版。石刻碑文の断片のような体裁だが、来歴、出自、作者、制作年代などは不明。
N. Müller, *Glauben, Wissen und Kunst der alten Hindus*, Mainz, 1822, Tab. I, Fig.91. 以下に引用 Carl Gustav Jung, *Psychologie und Alchemie*, Zürich, 1944, 1951, Fig. 108.



図3 ヴィクトル・ユーゴー《蜘蛛の巣ごしに眺めるヴィアンデン》
ヴィクトル・ユーゴー記念館所蔵。リュクサンブール政治亡命中の文豪が、寄寓先で描いた風景。幽閉に等しい境涯の心象風景が、蜘蛛の巣越しの空に託される。



図1 捕食者としての雌蜘蛛
Manuel Puig, *El beso de la mujer araña*
野谷文昭訳『蜘蛛女の接吻（キス）』



図9 映画「スパイダマン」から
著作権取得上の問題から
QRコードのみ掲載する。

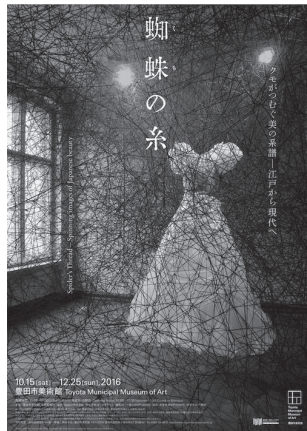


図8 塩田千春《夢のあと》2016年、写真：福永一夫：トヨタ美術館
展覧会「蜘蛛の糸 クモがつむぐ美の系譜—江戸から現代へ」2016年10月15日—12月25日より



図7 ポール・ケイラスの原著「因果の小車」英語版挿絵
Paul Carus, *Karma, A story of Early Buddhism*, The Open Court Publishing, Co., 1894

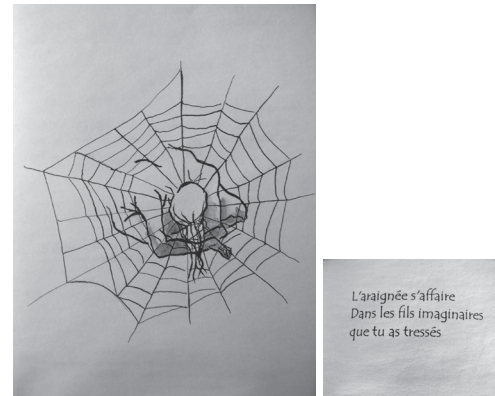


図4 脳内自生の牢獄としての蜘蛛の巣：Georges Friedenkraftの俳句、Robert Chazel 図版
原作：“L'araignée s'affaire/ Dans les fils imaginaires /que tu as tressés”/直訳：「君が紡いだ空想の巣糸のなかで、蜘蛛は自分の仕事にせわしなく」© G. Friendenkraft/ R.Chazel



図2 上村松園《焰：六条の御息所》1918年、絹本着色、東京国立博物館所蔵

……船が陸に着き、身を寄せているときには——一匹の蜘蛛が糸をつむいで渡すだけで足りる。それより強い縄などを要らぬ。フリードリッヒ・ニーチェ『ツァラストラかく語りき』⁽¹⁾

◆論文集の題名に関する注記

本論集は「蜘蛛の巣」webに注目する。internetの電子回路World Wide Webに見えるwebとは、元来「蜘蛛の糸」が織りなす錯綜した網状組織cobwebを意味する。蜘蛛が捕食のために設ける網状の罟。そのwebはいまや、電磁波へと生態を変貌させ、地球の表面をこの二十年足らずのうちに覆い尽くした電子情報網として、人類の日常生活にも必須の媒体へと成長を遂げた。だが、インドの古典に描かれた寓意では、「蜘蛛の巣」は、人々の意識に巣食う迷妄Mayaの「あや」でもあった。自らの尾を噛んで円環をなす蛇oupopodogopogは永劫回帰する世界の外輪。百科事典と訳されるencyclopaediaは、Euklydos mousetを語源とし、円環をなす知識を意味し、日本でも西周は「百学連環」の訳語を与えた。その知の円環をなす回廊という枠のなかに棲まう蜘蛛とは、アートマンआर्त्तमन् आर्त्तमन् Armanたる「我」でもあれば全知全能の主、ブラフマンब्रह्मन् Brahman 梵天とも見做され「梵我不二」ともされる。蜘蛛の網目はコスモスの縮図でもあれば、それ自体が「無明」でもある。パリー語のavijja(अविज्जा)、サンスクリット語のavidya(अविद्या)の漢訳がすなわち「無明」なのだから(原語表記は仮に現代の綴りを記す)。

電子ネットワークは、すべての知を集約し、瞬時の情報交換を司る。そこに全能への夢を託す論者がある一方で、この二十年、それはまた予測不可能で未曾有の事態をも招来してきた。そうしたなか、本論文集は、webの語源にまで遡り、太古からの智慧をも汲むことを通じて、昨今の電子環境を問い直し、認識の盲点を探り直すかたわら、可能な範囲で将来への指針となる「蜘蛛の糸」を探り出すことを目標とする。それはもとより既存の学問分野の範疇には収まらない。個々の学問分野がどのように触肢を伸ばし他領域とどのように連結してゆくかを示すダイアグラムscience mapも知られるが、その形状もまたwebをなす。そこに現れる星座constellationは、学術分野の消長とともに、急速にその形態を変貌させつつある。例えば、二十世紀後半まで主導的なコアをなしていた原子物理学は、二一世紀に入ると急速に凝集力を失い、かわって分子生物学が情報理論などと密接な関係を結んで、新たな中核を構成し始め

ている。編者の言葉遣いでいえば、ナノ・バイオ・サピオの三部門の収斂が顕著だが、この事実そのものも「蜘蛛の巣」という本書の問題提起に直に呼応する。⁽³⁾

ここで自然界のクモが営む「蜘蛛の巣」に一瞥を加えよう。⁽⁴⁾クモにとっては必ずしも「住処」という意味での「巣」ではない。だがここでは便宜上、日本語の慣用として「蜘蛛の巣」を用いたい。それは捕食用の網でもあれば、そこに捕らえられた餌食の振動をクモの足に位置する感覚器官に伝達する神経経路の外部延長でもあり、また同心円の糸が粘着質の分泌物の玉に覆われているのに対し、放射状の糸はクモが移動するための経路ともなる。いわば物流や情報伝達の交通網だが、その電子版、electronic highway 構想は、韓国出身の藝術家、白南準[*Nam Jun Paik*]が、北米で提唱したstationary nomadつまり「定住的遊牧」に淵源を持つ。クリントン政権下の副大統領ゴアが自分の発案を「盗用」した、と藝術家はなかば冗談まじりに揶揄したが、「巣」の中央に陣取って貧乏揺すりしながら、全世界を同時に中継する電子情報網に先鞭をつけたのが、他ならぬバイクだ⁽⁵⁾。思えばバイクは、合成繊維のナイロンを韓国で商品化し莫大な資産を築いた財閥の御曹司である。伸縮自在の網状組織が世界制覇を遂げたその余得が、次世代で電子環境に越境を遂げ、WWW「世界を跨ぐ網目」へと飛び火している。——おそらくまだ誰も指摘していない事実だが、これはおよそ無意味ではありえない。

◆ネットワークとその空隙

網目といえば、とかくその結節点における連結機能の実体部分に注目が偏る。例えば話題を呼んで久しいブリュノ・ラトゥール推奨のactor-network理論も、英語のnetworkの含意もあってか、もっぱら情報伝達網の相互操作に重きを置く⁽⁶⁾。だがナイロン・ストッキングの網目をみるとどうだろうか。結節点は経糸・横糸の交差の結果でしかなく、そこには固定した実体はない。繊維の伸縮性に加えて縦横に織りなす交差の可変性が、網目に柔軟性としなやかさを約束する。加えて網構造の利点は、選択的透過性にある。とかく容器には気密性が求められるが、実際には目的と用途に応じた透過膜こそが、物質変換や新陳代謝には不可欠となる。見やすい例はビーヴァーのダムだろう⁽⁷⁾。この齧歯類が木の幹や枝を組み合わせて造るダムは、水を完全に堰き止めはしない。ほどよい水量調節には、ダムを構成する素材の隙間が大切になる。⁽⁸⁾ ナイロン・ストッキングも皮膚呼吸を維持しながら保温と形態可変性を確保し、皮

膚を保護するのに適した繊維の太さと網の目の粗さ／稠密性を計算して縫製される。漁網の場合にも、捉えるべき獲物の寸法や重量、運動能力に応じて、網の目の寸法や素材の強度が調整される。そしてもとより不要となった海水を排水できないことには、網はその目的を果たさない。ここで網状組織は、網目の大きさに掛かる魚だけを抽出し、他の不要物を液体とともに濾し出す篩（ふるい）の役割を果たすのだから。そして、液体を気体に置換するならば、事は風を通しつつ獲物は逃さない蜘蛛の巣においても、同様だろう。否むしろ、ヒトは蜘蛛の巣を目にして、その知恵を借り、漁網を発明したのではなかったか？

網に代表されるような、選択的透過性を持つ膜上組織は、その手前と背後とで選別を行い、時空に二重性を齎す。それも静的で固定した二重構造ではなく、常に生成過程にある二重構造を媒介する。フィルター構造といってもよいが、これが学術あるいは知識の生成モデルにも有効な示唆を与える。およそ生態系一般に、ふたつの特性を異にする環境が相互に接触し相互貫入して交換を営む場所は、生命現象に重要な役割を果たす。真水と塩水が混ざる汽水圏の干潟、森林と溪流とが接する川岸、湖水周辺の沿岸部などが典型的だが、さらにはヒトの手が入った都市圏の周縁部が、野生動物にとっては意外にも好都合な繁殖地を提供する事例も知られる。いわゆる里山や入会地などは、ヒトの社会契約のうえでも複数の所有権が重層する場所だが、ひとたびそうした人為的な管理が放棄されるや、自然環境の遷移が「暴走」して手のつけられない「荒れ地」と化す事実も、またよく知られている。

◆選択透過性と知の営み

生命現象一般とも同様に、知識もまた選別行為を基礎とする。特定の対象をある尺度で選別し、不要物を排除する一方で、不可欠な素材を取り込み、必要に応じてそれを加工する。その生態を吟味するうえで、蜘蛛の巣モデルの有効性をいささか検証してみたい。選別の枠組みとなるのが「理論」であり、それが蜘蛛の巣に相当するならば、そこに掛かる獲物がデータあるいは研究対象、さながら研究者とは、巣で獲物を待ち受ける蜘蛛に喩えられよう。フランス語には「朝の蜘蛛は不機嫌、夕刻の蜘蛛は希望」*araignée du matin, chagrin, araignée du soir, espoir*との諺がある。朝露をものともせず蜘蛛が齧齧と働いているなら、日中に降雨を覚悟せねばならぬ。反対に乾燥した夕刻に蜘蛛が巣作りに忙しいなら、夜中に雨が降る心配はあるまい、晴天が期待できる――。迷信がらみの天気予測で、一七世紀

ころに成立したものと推定されている。蜘蛛の行状に自然現象の予兆を見る観察だが、蜘蛛にとってみれば、夕刻に完成した巣は捕食への希望、朝露に覆われた巣は悲哀の印でもあろう。

この諺とは裏表にも見えるが、教養とは、蜘蛛の巣に捕らえられた水滴のようだ、との比喩がある。朝日に輝き、互いの表面に隣の水滴を映す水玉の群れば、玉の連環のうちに、叡智の星座をなす。だがあまりに多くの水滴が集まれば、蜘蛛の巣は壊れてしまう。また強い風に煽られれば、宝玉のように虹色に輝いていた水滴も、落下して消滅する。そして朝露を宿して輝いていた蜘蛛の巣も、やがて夕刻にはあちこちが破損して、不規則な毛玉のような廃墟に変貌する。叢に分け入って木々の枝を払い除けるうちに、うっかり壊れた蜘蛛の巣の残骸に触れようものなら、ネバネバとしたタンパク質、フィブロインの糸くずに纏わりつかれ、厄介なことこのうえない。それはまるで、過剰な学識がまどろっこしく、鬱陶しいのにも似る。老齢の知恵者ともなると、学識は不必要にこんがらがって、邪魔になるので世間から煩がられ、敬遠される。古い蜘蛛の巣のように厄介だ、と。あらたな智慧を獲得するのに適した粘性や吸着力が、ある段階を超えると逆に、無意味な「しつこさ」を発揮して足手まといになる。

ひとつの蜘蛛の巣が支えることのできる水滴あるいは獲物の質量にも、限りがある。その素材の強度限界からして、蜘蛛の巣は無限に拡大することもできない。ところがヒトが開発した現在の電子情報網は、少なくとも理論上は、無限拡大するwebを想定している。単独の機器に備わった記憶容量に限界が見えると、蜘蛛ならぬ雲Cloudあるいは群衆crowdによる分有によって、big dataの容量限界は克服された。もちろん光速の処理能力の限界はあるが、量子コンピュータなどの技術革新を待つことなく、すでにヒトの神経系による情報処理の演算速度は、質量とも、あっけなくAIに凌駕されている。

残る問題は、個別の計算の対象をいかにして選ぶかの座標軸の新規設定、優先順位、取捨選択および改変能力だろう。自在な設定のためには価値判断が不可欠となるが、その判断能力を「知性」と定義する限りにおいて、現在の人工頭脳Artificial Intelligenceに「知性」は宿らな⁽⁹⁾。 「知性」の擬態を演じさせる技法はあるが、その「擦り込み」そのものも、ヒトが外部から与える必要がある。ヒトの介入なく機械が新規の価値判断に基づいて自走を始める段階がいわゆる「特異点」Singularityだが、それが人類の意図とは無関係に、不意に到来するか否かについては、技術論のみならず哲学的な議論に、現段階ではなお決着がつかない⁽¹⁰⁾。

◆知性という織物

ここで蜘蛛の生態に戻ろう。右の定義に照らして、蜘蛛には「知性」を認めうるのだろうか。観察によれば、蜘蛛は宇宙船の無重力状態でも経験を積みあげ蜘蛛の巣を編み上げる。それに反して地上でも環境が整わない限り、物陰に潜み、無条件に定型の巣を張るとは限らない。蜘蛛の種類によってその網が捕獲できる獲物は、質量ともに限定される。微小に過ぎる獲物は、もとより網の目に掛からず、獲物とならない。それどころか蜘蛛を産卵の苗床に利用する蜂のように、蜘蛛の天敵となる寄生昆虫も存在する。反対に巨大で強力すぎる獲物は、蜘蛛の巣を破壊する。蜘蛛は狩り場が有効と認識する限り、毎日のように巣を張り替える。毀られた巣の残骸は、自らの食料としてリサイクルする。言うまでもなく、捕獲されて蜘蛛の糸に絡め取られた餌食は、消化され、次の巣の材料や、世代交代のための栄養として消費される。

学術の営みも、この蜘蛛の営みに酷似する。そもそも「いとまみ」は「いとま」の「ない」状態に由来するとの語源説もある。「甚だしい」の意味の「いと」は偶然だろうが「糸」と同音。「糸」は「ま」間がない稠密状態にならなければ織物 web としては機能しない。文字を配列した文書は text と呼ばれるが、これも textile と語源を共有する。織物は緯糸と経糸との絡み合いからなるが、文章も統辞という経糸と連辞という緯糸の交差の上に紡がれる。また web も weave すなわち「織り」から派生する。ギリシア神話では機織りの女アラクネーが蜘蛛の語源となり、彼女は智慧の女神アテーネーと技を競った咎で蜘蛛に変身させられた。オウィディウスの『変身譚』に見られる逸話だが、思えば機織りはもともとヒトが最初に考案したデジタル機器。ここからも知と織物と *web* とには顕著な親近性が認められる。「機」(仏・mûche)には執拗なまでに、蜘蛛の「知性」がその影を宿している。

ここで、学術における理論展開の参照枠、座標軸、あるいは対象把握のための網の目をさらに詳しく検討しよう。仕掛けた網にかかる獲物が学術の対象となり、それをどのように料理するかによって専門分野特有の方法論が彫琢される。これは狩猟型の学術探究に妥当する比喩だが、西欧で発達した学術や科学方法論には、顕著な特徴となる。と同時に、「待ち伏せ」は定置網でもあって、それをどこにいつ仕掛けるかが成果を左右する。ここで、獲物の生態への知識が前提として要求されることになる。対象を把握するための理論の枠組み、網の目である「蜘蛛の巣」のネッ

トは、昆虫採集者の「捕虫網」だが、蜘蛛たる研究者は対象を分析するにつれて、それを素材に理論すなわち「蜘蛛の巣」をより精緻なものへと改良し、よりよい数値データや実験材料を確保できるように工夫する。蜘蛛の巣に掛かった珍品や新種の獲物が研究成果として顕揚される場合もあり、あるいは高性能の蜘蛛の巣が、新世代の実験装置として評価の対象となる。望遠鏡であれ、顕微鏡であれ、対象把握のための「蜘蛛の巣」の進化過程の証拠物件にはかなるまい。他方、糸でぐるぐる巻きにされて捉えられた獲物は「新発見」の「証拠物件」として、博物館や文書館に学術登録され、あるいは剥製にされ、資料・サンプルとして利用に供され、あるいは後世への遺産として保存・相続される。

◆言語モデルの「蜘蛛の巣」と現実という「獲物」と

そもそもヒトは二重分節言語を操る生物であり、語彙の織りなす「投網」をまず現象界に被せることで「モノ」を個別の「コト」として「名付ける」ことにより認識し、それを主語と述語よりなる統辞の鑄型に嵌め込むことで世界を認識する。その延長上で、自然界を目的合理性に応じて恣意的に「切り分け」、選別し、特定の焦点距離や倍率、さらには適切と思われる偏光フィルター越しに観察するのが、自然科学の「方法」であり、そこで選択すべき方法を考察するのが「理論」theory であって、それは「実践」practice からは峻別されてきた。概略、これが古代ギリシアに自らの知の淵源を遡及的に求める、現在の自然科学の前提条件となる。だが言語や数式に託された理論枠は、現実の一断面を記述できるにせよ、現実が執拗なまでに理論の網目をすり抜け、変貌を繰り返し、理論の網を掻い潜って逃走する。トーマス・カーライルが『衣装哲学』で述べたように、衣服という覆いは身体から否応なく遊離する。技術と名付けられた人為は、自然に対して過剰であり、逸脱を内包している。神話によれば、神々から炎を盗んだプロメテウスは岩に縛られ鷲に生肝を突かれる劫罰を得た。神々より機織りが上手だと自慢したアラクネーは、蜘蛛の地位に貶められた。そこにはともに、知識の獲得と裏腹の高慢さへの自戒あるいは警告が、教訓として盛られている。学術的営為を蜘蛛の巣の比喩で吟味すると、この段階で、通常、科学的探究と目されている営みが隠蔽している不都合が、少なくとも三つほど露呈する。まず蜘蛛の巣は、其処に捕われる獲物にとっては、「罨」としては不可視でなければならない。蜘蛛は種類によっては獲物の注目を惹くように網に偽装を施しもある。いざれにしても詭え向き

の獲物の選択基準は、事前に明示されることはなく、悟られないように隠されている。獲物がかまって初めて、それは過小でもなければ強大すぎもしない適正規模の対象だったが、あくまで事後に判明する。罠という理論枠の合理性は、その限りでは「後付け」の遡及だったはずである。これは「目的合理性」を根拠とした理論的仮構構築作業とは、あくまで異質である。実験はやってみたいと、うまく行くとは限らないのだから。

そこでふたつ目に判明するのは、理論枠とそこに検知されるデータとのあいだに隠された、暗黙の循環論法、共犯性だろう。見事に網にかかった獲物は、網の有効性を立証するが、そこには一種の密約、淫靡な予定調和が隠されている。周知のとおり、プラトンの『メノン』には、人は自分の探しているものを見つけたことはできない、とする有名な詭弁がある。探し求めるものがわかっているなら、今更探す必要もないだろうが、逆になにを探しているのかわからないならば、もとより探し方もないのだから。その両者の間隙に実際の探究は成立する。マイケル・ポランニーが「暗黙知」tacit knowledge の次元と呼んだ領域だが、それを裏読みするならば、どうだろう。理論的な枠組みには、自らの有効性を証明するような事例を優先して取り込みがちな性向があり、うまく取り込まれたデータには、理論枠の正しさを補強する性質がある。理想的な実験環境は、理想的なデータを検出するのに最適な条件を揃えた人工的な閉鎖系だからである。だからこそ、罠Ⅱ理論Ⅱ特定の座標軸設定が取り零したデータに注目し、あるいは蜘蛛の巣を壊してしまうような「捕獲許容外案件」を無視せず注視する必要があるが、自家中毒を回避するうえで必要となる。科学哲学者のカール・ポパーが「反証可能性」refutability として指摘したのは、この盲点への警告でもあったはずだ。蜘蛛は毎日、みずからの捕虫網を修復しなければならぬ。理論には脆弱さが必要なのだ。

ここから「狩猟モデル」の第三の陥穽が見えてくる。それは端的にいえば「食物連鎖」の階層秩序の「頂点」を占めるとの自負への疑義、そして「目的合理性」への疑念だろう。狩人はとかく戦利品をこねみよがしに顕示して自慢する。Trophy Display であり、博物館といった施設もそうした戦勝記念碑の制度化の一環だろう。だが蜘蛛の「営み」は、むしろ食物連鎖のひとつの頂点に君臨しながらも、物質分解者の地位に甘んじる。微生物や細菌といった最終分解者の役割に比べれば、蜘蛛はまだ中間分解者だが、生態系の清掃担当として、物質循環に果たすその役割は看過できまい。⁽¹³⁾「蜘蛛の巣」もそのための道具立てのひとつであり、それは日々修繕と補填により更新されるべき、束の間⁽¹⁴⁾の図形、自己顕示欲とは無縁の幾何学模型、あるいは不規則な立体のメッシュ構造。それは獲物を把握するための目的合理性を備えているように見えてつ、実際には予期せぬ侵入者によって容易に破損される儂い仮構に過ぎない。そしてそこには意図せぬ枯れ葉や思わぬ闖入者も訪れ、それらが重畳・堆積すると、web 走査線が張り巡らされた「蜘蛛の巣」という画面のうえには、およそ目的合理性とは無縁の凶案の転交の様が、季節と時刻の推移に呼応して、風任せよろしく描かれることにもなる。

◆本書の展望にむけて

捕食者であるはずの蜘蛛は、自らが織る網の補修に追われる奴隷かもしれない。それは自らの頭脳が編み出した WW というオリ（織・澱・檻）、無明の迷妄（マヤー）に幽閉された人類社会にも通じる。蜘蛛の巣という「展翅台」ないしは展示板 screen/albeau のうえには、いわば偶然任せの誰の意思でもない絵柄が、たまたま重なった諸条件の総和として、束の間出現し、やがて下地をなす座標軸 matrix もろとも解体されて、風景は季節とともに移ろってゆく。蜘蛛の糸の織りなす網という「地織」と、そこに捕らえられた獲物の死骸や付着物という「図柄」との相互依存が、メビウスの帯よろしく、表裏を入れ替えつつ、時空のなかで暇なく変貌を遂げてゆく。生態系という環境のなかで、その生理や原理を掴み取ろうとするヒトの認識の「営み」も、これと同様に「糸間なく」忙しない試行錯誤の連続、果てしない構築と解体の表裏の「あや・綾・彩・文」として理解されるべきではあるまいか。

「目的合理性」の呪縛に囚われた法則モデル構築、完璧かつ普遍に永続する「蜘蛛の巣」というコスモス構造探究の夢想、人類をそうした「進化発展史観」に長らく囚えてきた「輪廻転生」の迷妄。いま求められるのは、そうした「迷妄」から「降りた」、「解脱」へと向かう別種の循環的で柔軟なモデル、ではないか。⁽¹⁴⁾生態系に寄り添って編み上げられては不断に崩れてゆく可塑性のある多孔質で柔軟かつ選択的透過性を旨とした、束の間で一過性の認識模型、sustainable といった人類の傲慢からは袂を分かち、SDG、すなわち Sustainable Development Goals などと呼ばれる標語におお温存されている偽善と高慢とを払拭する謙虚さを、あらためて「蜘蛛の巣」モデルから学ぶべき季節が到来しているように思われる。⁽¹⁵⁾それは Sustained Disposable Garbage Systems の模索ではないか。「異常気象」による気候変動が「常態」と化した二一世紀二〇年代地球の、「水洗便所循環系」模索への生態学的目標をそこに見定めたい。⁽¹⁶⁾

【文献一覧 *原典の欧文表記は巻末の「注一覽」に記載する】

- 赤木昭夫 二〇一三：「二世紀のための教養―学術の連環―鈴木貞美・金子務（編）『エネルギーを考える―学の融合と拡散―』（総合研究大学院大学・学融合推進センター研究助成プロジェクト）「日本における諸科学の編成と基礎概念の検討…文理融合研究の有効性を探る」、作品社、272-295。
- 浅間茂 二〇二二：『クモの世界―いとをあやつる8本脚の狩人―』中公新書。
- 稲垣論 二〇二二：『滅亡へようこそ「終わり」から始める哲学入門』晶文社。
- 稲賀繁美 二〇〇六：【書評】「イメージはいかにして生まれ、伝播し、体験されるのか…20世紀の知的精神史の生態を骨太な輪郭で縦横に描く…ジョルジュ・ディディエールユールマン著『残存するイメージ…アビ・ヴァールブルグによる美術史と幽霊たちの時間』』図書新聞』2789号、二〇〇六年九月九日。
- 二〇一九：「道・無框性・滲み―美術における「日本的なもの」をめぐる省察」坂本康宏・田中純・竹峰義和（編）『イメージ学の現在 ヴァールブルグから神経系イメージ学へ』東京大学出版会、279-296。
- 二〇一九b：「耳」「声」「霊」：無意識的記憶と魂の連鎖について」山中由里子・山田仁史編『この世のキワ』勉誠出版、249-266。
- 二〇二二：「ベルローと世界美術史の構想」永井敦子・畑亜弥子・吉澤英樹・吉村和明（共編）『アンドレ・マルローと現代―ポストヒューマニズム時代の〈希望〉の再生―』上智大学出版、262-286。
- 二〇二二：「九鬼周造と輪廻転生」吉永新一／岡本桂子／荘千慧（編）『神智学とアジアン』青弓社、206-225。
- カーツワイル、レイ 二〇〇七：『ポスト・ヒューマン誕生』井上

- 健監訳、NHK出版。
- ゴールドファーブ、ベン 二〇二二：『ビーバー 世界を救う可愛すぎる生物』木高恵子訳、草思社。
- シールドレイク、マールリン 二〇二二：『菌類が世界を救う キノコ・カビ・酵母たちの驚異の能力』鍛原多恵子訳、河出書房新社。
- 中田兼介 二〇一九：『クモのイト』みしま社。
- 馬場友希、鈴木佑弥・谷川明男 二〇二二：『クモの巣 ハンドブック』文市総合出版。
- バラッド、ジェイムズ 二〇一五：『人口知能 人類最悪にして最後の発明』水野敦訳、ダイヤモンド社。
- ホーキンス、ジェフ 二〇二二：『脳は世界をどうみているのか』大田直子訳、早川書房。
- ポランニー、マイケル 二〇〇三：『暗黙知の次元』高橋勇夫訳、ちくま学芸文庫。

蜘蛛の巣上の無明——インターネット時代の身心知の刷新にむけて

目次

序論 本論文集の構想について

稲賀繁美 iii

【コラム】無明長夜の照らすもの——経糸ズイトラのひろがりを手がかりに

打本和音 xvii

第I部 想像力 「蜘蛛の巣」が喚起するもの

芸術家としての蜘蛛の系譜——蜘蛛の巣という小宇宙をめぐる詩作の比較文学

橋本順光 3

蜘蛛の巣上のゴースト

平芳幸浩 13

バミューダ産から日本産へ——テッポウユリの貿易とアメリカ市場

藤本憲正 25

無限への道としての網穴——草間彌生の網と水玉の相関関係再考

近藤貴子 38

【コラム】ヴェイクトール・ユゴーと蜘蛛の巣

糸永・デルクルル光代 51

【コラム】クモの網と「共生」社会のゆくえ

白石恵理 55

【コラム】中国伝統文化やサブカルチャーにおける蜘蛛の表象について

許躍焯 59

第II部 研究方法論 「蜘蛛の巣構造」による研究領域の刷新

南方熊楠と蜘蛛——その蜘蛛の巣のような学問方法について……プラダン・ゴウランガ・チャラン

65

マルグリット・ユルスナール『黒の過程』の思索と方法

村中由美子 71

「妖怪」はどこに棲む？——インターネット時代の怪異・妖怪文化

松村薫子 82

蜘蛛は動物愛護の対象となり得るか——動物の愛護と管理の関係を考える

春藤猷一 91

蜘蛛の巣構造的つながりの見地からの移住史——水田稠の移住事業観の連続性

飯窪秀樹 101

【コラム】日本人移民とサンパウロ州ノロエステ（北西）地方

飯窪秀樹 112

【コラム】蜘蛛の巣越しの空——天空を覆う蜘蛛と電線の画像学

橋本順光 115

【コラム】グラフィックデザイナー・里見宗次のアーカイブズ資料にみる〈蜘蛛の巣〉

前川志織 122

【コラム】蜘蛛の「雄食い」と八本脚の魅惑

森田百秋 127

第III部 生態的・社会動態論 「蜘蛛の巣」模型の有効性と限界

蜘蛛のアナンシはささやく——ジーン・リースの混血の讒言者とナンシー・ストーリー

中村和恵 133

ジョン・ラファージと東洋思想の翻訳網

——『画家東遊録』におけるハーバート・アレン・ジャイルズ訳「荘子」……富永梨紗子 146

柳田国男の昔話採集——情報網構築の視点から

志賀祐紀 158

一九五〇年代日本再考——野間宏「歴史の蜘蛛」から

竹村民郎 169

【コラム】支倉常長使節団を再考する

滝澤修身 181

【コラム】昔話「賢こ淵（水蜘蛛話）」の蜘蛛の糸——情報ネットワークとしての糸

志賀祐紀 191

【コラム】蜘蛛手なすアマゾン航路と日本人移民入植

根川幸男 193

【コラム】トマス・サラセーノ <i>in orbit</i> (2013) インスタレーション	富永梨紗子	196
——K21州立美術館 ドイツ・デュッセルドルフ		

第Ⅳ部 電子媒体・身体と都市 「蜘蛛の巣」情報網 Net 社会の光と影

蜘蛛の巣上で輻輳する交通と通信	新井菜穂子	201
「わざ」はどのように伝えられるのか		
——オンライン稽古の(不)可能性からみる身心知の可能性	鑄物美佳	214
Webの思想——通常科学と疎外をめぐって	尾鍋智子	224
——藤井聡太 蜘蛛の糸を操る	多田伊織	236
【コラム】蜘蛛の巣状の都市——都市論の視点から	江口久美	249
【コラム】「蜘蛛手なす都市」 北京・壁に囲まれた都市	新井菜穂子	253
【コラム】糸を媒体とするフランス現代アーティストとの対話から	糸永・デルクール光代	256

第Ⅴ部 言語論的転回 脳科学・神経系美学を超えて

蜘蛛の巣としてのラング——丸山圭三郎を手がかりに	藤貫 裕	265
認知と蜘蛛の巣——自閉症者(ASD)の自伝を読む	森岡優紀	275
異種のタイポグラフィ——宮沢賢治「 <small>アネリクタンツェーリン</small> 蠕蟲舞手」	平倉 圭	286
「蜘蛛の巣」状モデルの学術的有効性に関する学説史的考察		

——ティム・インゴルド『生きていること 動く、知る、記述する』を参照しつつ	稲賀繁美	299
【コラム】蜘蛛の巣サイクルと「期待」	鈴木洋仁	311
「ピンクスパイダー」の糸	君島彩子	314

成果概要…本論集の目論見と論文集の構成	稲賀繁美	321
---------------------	------	-----

あとがき	稲賀繁美	333
------	------	-----

【巻末資料】

SNS時代の「定住的遊牧」…脱国民国家を志向する仮想空間の身体倫理を問う	稲賀繁美	21
「蜘蛛の巣」の網の目のなかの国際日本研究		
——国際日本文化研究センター30年間の活動を「蜘蛛の巣モデル」に照らして吟味する	稲賀繁美	31
海洋と環太平洋にひろがる「蜘蛛の巣状の網の目」を触知する		
——次世代の国際日本文化研究に向けての提言	稲賀繁美	42
「蜘蛛の巣」研究会の実施記録		

【論文・コラム】注一覽	48
索引(人名・事項)	12
執筆者紹介	8
欧文要旨	4
欧文目次	1

*本文中の注番号に対応する注は、巻末に「論文・コラム」注一覽」として一括掲載した。

「蜘蛛の巣」状モデルの学術的有効性に関する学説史的考察

——ティム・インゴルド『生きていること
動く、知る、記述する』を参照しつつ

稲賀 繁美

本章では「蜘蛛の巣」を「知の生態」を吟味するために有効なモデルあるいは比喩として取り上げた共同研究会の意図と射程を、論集導入での説明とは違った角度から、本書全体のまともも兼ねて、あらためて掘り下げたい。ここで「比喩」metaphorはギリシア語の μεταφορά に由来するが、語源としては「越えて」meta「運ぶ」pheroに由来し、現代ギリシア語で μεταφορικό とは「人々を運搬する手段」すなわち公共バスを意味する。筆者としては、ここに「蜘蛛手」なす交通網・情報網の機能に係わる「暗喩」を探るとともに、生態系に於ける新陳代謝や物質循環が、相互依存関係の「生きた比喩」として溶け込まされて生起する様態をも、示唆しておきたい。

ここでは本章の意図を明確にするため、日本語訳が二〇二一年に出版された、文化人類学の著書への批判的検討を軸として、議論を進めたい。とりあげるのは、ティム・インゴルド『生きていること 動く、知る、記述する』。原著 *Being Alive* は二〇一一年刊¹⁾。当時著者インゴルド Tim Ingold は六三歳。現在の評者とはほぼ同年齢である。そのため評者は十年の遅延を伴いつつ、異なる専門分野に属し、違った道程を辿りながらも、なかきわめて近い思考を紡いできた著者の航跡を追尾する、希有な体験を得た。とりわけ「蜘蛛の巣」研究会の構想にいたる軌跡を学術的に吟味するうえで、本書はきわめて有益な道標を提供する。なぜなら本企画とはまったく独立した企画でありながら、同書には、「蜘蛛の糸」が織りなすネットワーク構造へ方法論的批判が展開されているからである。この点に留意し

つつ、本稿では、和訳で六百頁近い本書全体に言及することは放棄し、本「蜘蛛の巣」研究会構想との接点、ふたつの「蜘蛛の巣」がゆくりなくも錯綜する現場の検証と、それゆえの両者の「縄れ」や相互干渉の的を絞りつつ、同書の扱う話題と思索への私見を交えつつ、考察を展開する。⁽²⁾

一 前提鳥瞰

最初に編者の関心が『生きていくこと』と交錯する論点を列挙しておく。第一部は「地面を切り拓く」と題されるが、手や腕による世界操作ではなく「足」による知覚世界を「歩く」意味が問われる。対するに編者は、『接触造形論』において、素足での武術の稽古について考察を巡らせてきた。第二部「メッシュワーク」。編者も日本語では「蜘蛛の巣」と呼ばれるウエップに生きる蜘蛛の生態を暗喩として情報科学の常識を問い直す共同研究を進めつつある。流行のアルフレッド・ジェル Alfred Gall の agency 理論⁽³⁾やブリュノ・ラトゥール Bruno Latour らの actor-network 理論に本質的な疑念を抱き、華厳教学の因陀羅網に頼って、ナム・ジュン・パイク Nam-jun Paik を含む現代藝術の一群の創作を分析してきた編者としては、著者の mesh 論は無視できない。⁽⁴⁾ 第三部「大地と天空」。ここで風あげの意味が問われる。編者もまた従来の認識主体と対象物との区別に立脚する観察方法への抜本的な問い直しのきっかけとして「和風」に関する国際会議に参与してきた。⁽⁵⁾ さらにその延長上

で、「稽古」における身体接触を通じた伝授に注目し、能動と受動との区別を超えた、いわば中動的な相互作用に、従来の情報理論の致命的盲点を指摘してきた。⁽⁶⁾ 第四部「物語られた世界」。ここでは直接体験・観察行為・その記述という古典的な位相差に疑義が呈される。これは西アフリカの神話的世界の学術的扱いに疑念を抱いてきた編者にとっても、切実な方法的問いだった。⁽⁷⁾ 口頭伝承を文字記述に回収する編集作業は、神話の生態を裏切り、生きた語りを死体へと屠殺する。ここで学術業績は遺体処理の墓地管理業に酷似した醜態を晒す。それを受けた第五部は、前著『ライオンズ』とも輻輳しつつ「線描」の生態に迫る。ここで原著者が言及する東洋の「書」に関しては、編者も、おそらく偶然には留まらぬ事情から、ノーマン・ブラインソン Norman Bryson やジェイムズ・エルキンス James Elkins といった、原著者の取り上げる数人の論敵とも密接な交友があり⁽⁸⁾、彼らとの対峙の中で水墨画の筆遣いや、織物としての text の生成に、美学的あるいは現象学的な考察を加えてきた。⁽⁹⁾ 事は漢語の「道」の洞察に至るが、原著者は、矢代幸雄が特筆した荊浩の『筆法記』に言及する一方で「世界内存在」In-der-Welt-Sein, being-in-the-world (194, 377) という天心・岡倉覚三経由でハイデガー Martin Heidegger も考察した概念にまで接近している。⁽¹⁰⁾ 一方で問題とされる「道」Weg および、過程としての「道行」in the passage についても、編者は国際的な学会の場で、すでに複数の見解表明をなしている。⁽¹¹⁾

二 糸を紡ぐ

以上の見取り図を前提として、以下、原著者インゴルドの見解と編者のそれと擦り合わせたい。それは糸を紡ぐ営みであり、そこには network ではなく mesh を浮かび上がらせたい。network がその「節」nod をつなぐ⁽¹²⁾は前提の主体として関係を組み上げるのに対し、むしろ組み上げられた編み目 mesh のうえに座を占めるのが、因陀羅網の比喩だろう。蜘蛛の巣の上に朝露が結ばれ、ひとつひとつの露には他の露たちの姿が写り込み、ひとつの水滴の姿は、他のすべての水滴の表面に微細な映像を投射して⁽¹³⁾る。Agency や actor を前提とする立論ではなく、関係の錯綜のうちに、主体はあくまで事後的に、その関係項からなる mesh の環境条件に適合した形象として析出する。この発想の転換は、個人の尊厳を出発点とするキリスト教の伝統を引きずる西側世界では、未だに容易には受け入れられない。編者はこの困難を乗り越えるために、氣象学的構想力を提唱してきた。台風ひとつ見ても、上昇気流の巨大な渦巻の発生が台風の目を空洞として形成する。それは初期のジョルジョ・アガンベン Giorgio Agamben が処女作『中身のないう人間』でヘーゲル G.W.F. Hegel を読み替える⁽¹⁴⁾つつ提起した藝術創造の主体像に酷似している。さらに地殻変動に感応する地学的想像力を評者も提唱してきた⁽¹⁵⁾。

原著者はアラスカの民ココンヤ、南アフリカの民コイサン

が風に意識を注ぎ「氣象世界」に生きていくことを、ハイデガーを受けて、「氣象する」weathering と表現する (150; 291)。かれらの住居は流通を招き入れる「空隙」あるいは記載を乗せる「空欄」でなければならぬ。編者ならずとも海上を帆走する帆船を連想するだろうが、風上に向かう「間切り」を含め、一見気まぐれな帆走の航跡は、風向きを始めとした氣象条件を満たし、それと一体となることで描かれる軌跡であり、「風待ち」は「日和見」だが、そこには天候を予見する経験知が不可欠である。風の体験は音に結びつくが、soundscape は landscape という視覚による領略を転用した比喩として、原著者はこれを退ける。ココンには暖気・冷気の皮膚感覚、コイサンには風の運んでくる様々な臭気が大切だろうが、視覚の隠喩はこれを見捨ててしまおう。

ここで原著者はジル・ドゥルーズ Gilles Deleuze の条理空間 / 平滑空間の対比を援用する (164; 315)。この議論の前提として、しばしば見落とされるので補っておけば、解剖学用語では条理 strie は横紋筋、平滑 lisse は平滑筋を意味し、前者は骨格筋で随意運動に応じ、後者は内臓筋で自律神経系の支配下にある。フランスの哲学者は、前者を意識あるいは定住者、後者を無意識あるいは遊牧民へと結びつけている。インゴルドは、固定した分類枠に種別を登記する型の分類学的思考・系統発生学的なモデルをなす「条理空間」の傍らに、それには馴染まない浮遊性の生命の姿を感じて、それを「平滑空間」に位置づける。固定した属性や同一性によって括られ管理されることの

ないこれらの生命の生息地は、所有権が不明な限りで、「無主地」terra nullius (202: 392) と呼ばれるが、これは「海賊行為」を軸に世界文化史を再考した編者なりに言い換えれば「海賊」「山賊」^{*15)} ないしはお好みなら「馬賊」の出没する海域あるいは土地である。前者が「名詞」的存在ならば、後者は「動詞」的 (214: 412)。前者が「活字」なら後者は「線描」、前者が「音程」なら後者は「声」(233: 444) と、インゴルドは議論を横滑りに「平滑」させてゆく。

同様の二項対立が、完成した「油彩画」と線による「素描」にも適用される(第十六章「精神の歩き方」)。ここで原著者は西洋中世の修道院の記憶術をオーストラリアのアボリジナル絵画のみならず、カンディンスキーW. Kandinskyの画論、さらには荊浩Ching Haoに帰され五代から宋代に成った『筆法記』にまで縦横に結びつける。編者は華厳教学を導きとして同様の試みを現代美術論において試みたが、英語圏の査読者からは理論的な根拠に欠ける連想にすぎない、として何度も掲載を拒絶された体験があるだけに、この章はとりわけ興味深い^{*16)}。

編者の議論に強引に引きつけるならば、いずれの場合にも、表面の形態の相似の底には心的な深層が隠れており、それは聖書の想起であったり、祖先の記憶であったり、夢の形象であったりもして、「精神の眼」に拓かれる世界、魂に触れる次元である。荊浩は絵画に「精神、共鳴、思考、主題、筆、墨」の「六要」を指摘する(オズヴァルド・シレンO. Siren 訳: 253: 478)。原語漢文では「氣、韻、思、景、筆、墨」であり、最

初の「氣韻」は、一般には「氣韻生動」としても知られるが、その内実や歴史の変遷については、煩を厭って、いまは措く^{*17)}。

三 因果律の桎梏

いずれにせよ、ここではアリストテレスに淵源する「形相」と「質量」との対比、頭脳に宿ったアイデアを物質に型押しするという、西側世界での伝統的な発想とは異なる思考が躍動している点に、原著者の関心は向けられる。この文脈で原筆者がヴィレム・フルッサーVilém Flusserに注目していることも、編者には納得がゆく。フルッサーはその特異なデザイン論で、プラトニズムからアリストテレス主義に支配された、こうした思考法に根源的な疑念を投げかけていたからである^{*18)}。またそこには素材の癖に寄り添う「工藝」的思考の横溢することを、原筆者は見逃さない(256-7: 485-7)。つまり著者は「観念は結晶構造を持ち、現実とは液体である」との言葉を現代の建築書から引く。建築が理念という容器ならば、そこに住まうことが現実だろう。インゴルドは引かないが、「暗黙知」を提唱するマイケル・ポランニーMichael Polanyiならindwelling^{*19)}と呼んだ現象でもあり、これを編者は「棲み込み」と訳してきた^{*20)}。

さらに我田引水となるが、この「結晶」と「液体」との相互関係を理解するには、本邦の真言宗開祖・空海が練り上げた阿闍梨曼荼羅の世界観が有効だろう。金剛界曼荼羅は、多くの透明な結晶がクウォーツのように一定の周波で微細に振動している

水晶の世界。それと対をなす胎蔵界曼荼羅は、阿頼耶識と呼ばれる意識の流れの世界、液状に流転し、刹那滅を繰り返す。そして両者はメビウスの帯のように表裏をなして相互に転換をやめない。両界は不同ながら不二であり、密教の修法が実践的に教えるように、相互に障碍はなく、またここでは因果を越えた縁起が現象間を結びつけるゆえに、時間軸に沿った因果関係も、もはや絶対ではない。華厳教学は、因果や主客、過去現在未来の通念からの脱却を図るのだから^{*21)}。

話題がここまでくれば、もはや「旧来の因果の言語」(258: 490)では対処できない。この文脈で、インゴルドはドゥルーズとガタリの『千の高原』を手がかりに、奇しくも風揚げの話を持ち出す(259-260: 491-3)。風は地上の操作手が操作して空中を舞うわけではない。空気の流動によって賦活される風は、風と操作手とを結ぶ糸からは「逃走」する方向に舞い、独自の旋律を軌跡に残しつつ揺蕩う。それは操作手が主体となつて作り出す軌跡ではない線描を絶え間なく創出してゆく。風は複数の変数の相乗からなる連続的な変化に身を任せて巡行し、操作手はその状況に即応して絶え間ない微調整を要求される。それがサーフィンにおける身のこなしや、帆走するヨットの操船に似た行であることも、ここまでくれば明らかだろう^{*22)}。

果たして此処でなされる操作はパースC.S. Peirceのいう意味の「仮説的推論」abductionなのか(abductionは通常なら違法なる拉致、つまり「誘拐」行為を意味することも想起したい)、あるいは「即興」improvisationなのか(261: 495)。インゴルド

ドは両者を「縊り合わず」糸を語るが、これが本書最後の第五部で「線を束ねる」行為としての「記述」へと「撚り合」²³⁾ わされる。撚り糸や織物の比喩は、織りつつ織り込まれる相互作用の直喩となる。ここで、現場に参画する「行為」から「観察」さらには「記述」の三つ巴が問題となる。ただしこれに続く行文では、原著者が映像人類学や視覚文化論を論敵として議論をすすめるため、行文には錯綜が顕著となる。

可能な範囲で整理しよう。人類学者がフィールドで採取する口頭伝承の神話は、じっさいには語りの度に、聴衆の求めとも相関して微妙に変異する。それを活字による決定版へと洗練して印行するのが、かつては文化人類学者の使命だった。口頭の語りが連綿と続く線条ならば、活字への分節は、聞き手からの分離を意味する。手書きの手稿がキーボードの鍵盤によってタイプされる段階で、手仕事の痕跡は消去される。文字による分節は、アナログからデジタルへの電子機器の技術革新により、「他者性」への乖離をさらに促進する^{*24)}。

最初の「共在性」togetherness (267: 509) は、和辻哲郎がハイデガーに対抗して練り上げたMitseinの英訳でもあろうか^{*25)}、それは「観察」と「記述」という学術過程とともに疎外されてゆく。なぜなら「観察」も「記述」も主体と客体との分離を前提とするのだから。和辻の「共在」は、ハイデガーの「死に向かう」「時間内存在」に対抗して、空間に投げ出された現存在に注目し、個人と個人の「間柄」に倫理の基礎を据える「人間学」の基礎をなす概念だった。さらには、Mitseinの環境か

ら事後に析出するのが「個」である。これはインゴルドの言うメッシュの絡まりに生じる「節」との比較を促す。だが同時に、和辻の見る「環世界」Umweltの孕む環境学的な生態学的空間性に対してインゴルドのlinesがなお、きわめて切り詰められた一次元の線条性の比喩に傾いている兆候も浮かび上がってくる。両者はともにハイデガーが参照したユクスキュル Jakob von Uexküllの議論に依拠するにもかかわらず^{*25}。

四 枠組みからの逃避

さらに「観察」と「記述」には「枠付け」——特定の座標軸の優先的選択とそれが有効である範囲の確定——が不可避の前提条件となる。ほかならぬ和辻と同時代人の鼓常良は同じドイツ留学の過程で、日本美学の特質として「枠なし性」Rahmenlosigkeitを唱え、一定の評価を得たが、これも、偶然ではあるまじ^{*26}。「東洋」美術には「枠組み」がないとの「暴言」を吐いたのは「東西美術論」の著者、アンドレ・マルローだったが、もとより東洋の水墨による運筆は補筆修正を許さない——少なくとも通念としては。そこにノーマン・ブライソンは上塗りの修正による「仕上げ」を求める西洋の油彩画との本質的な違いを見出す。このブライソンの所論に、インゴルドは着目する。墨跡が生命の軌跡を直に紙面に定着するのに対し(269; 513)、「西側世界の「完成」fin/finishの理念は、そうした生成becomingの痕跡を消去する「お化粧」に重きを置く。そこに、

額縁で縁取られ、虚構の完結性を強いられた「作品」*ergon*が、はじめてそれ自体で「自律」*autonomy*を獲得した存在としての資格で「完璧」に成立する——歴史的存在(つまり「有限性」*finitude*)でありながら、時の摩耗を超えるかのような「永遠性」の虚構を背負った偶像として^{*27}。

——このように原著者の見解を要約すると、あたかも西側世界The Westの学術は、(東洋や日本を含む)それ以外The Restの地域の「生」な原料を加工して、「製品」と名付けられた人工物へと調理する「彫琢」であり、それが「文明化」の定義であったかのような印象さえ招く。それゆえインゴルドは「エスノグラフィ」は参与観察の文脈とはかけ離れた「書齋への撤退」だと形容する(270-71; 515)。「フィールド」*field*とは、調査現地への忠実さや、そこへの内属を意味するところか、むしろ反対に、記述者が現場への参与観察から目を逸し、「回顧的に創造するための特殊用語」(293; 552)に他ならない——この皮肉な観察は、「肘掛椅子 *armchair*」の思索(288; 543)へと退却する植民地的学術に対する、凶星を指した糾弾だろう。こうして最終章は、学術的規律としての人類学の方法論史を批判的に検討することを通じて、上記のような「エスノグラフィ」*ethnography*が本来の線条の *graphism* を忘却した逸脱に陥っている現状を糾弾し、かえす刀で本来のあるべき「人類学」*anthropology*への復帰を訴える。それは、現場と「ともにあること」*togathering* (268; 510)により「不可分の連続体」(273; 520)に随伴しつつ「手仕事」としての「線描」を「絶え間

ない微調整」とともに「巡回」し「遂行」してゆく「継続」の「職人仕事」(262; 498)となる。もとより定義からして、「生活世界」*lifeworld*; *Lebenswelt* (265; 511)に、動態とは無縁の固定した静態的「完成図」など、ありえまじ^{*28}。

五 同一性と差異

だが、このあたりで、原著者の論述は息切れし、また強引な議論に綻び目も目立ち始める。ここからは、本書日本語訳に寄せられた野中哲士氏の優れた解説に依りつつ、ただしその議論の繰り返しになることは避けながら、考察を進めたい。まず前提として、インゴルドは現象学というならば「ともにある」現場の「生活世界」の回復をめざし、それを従来の学術的な「観察」の枠組みや「記述」とは峻別する。そこに無意識と意識の位相差も重ね合わされる。日常生活が多く無意識な慣習行動なら、観察や記述はことさら意識的な注目を前提とするからだ。だがここには、一九八〇年代に流行した現象学の「生活世界」論による日常の過剰な美化が顔を出し、また同時代の構造主義で流行した意識と無意識との二分法の残滓という印象をも拭い難い。さらにもっと素朴な比喩でゆけば、たとえばディオニソスの混沌をアポロンの合理的な理性で整理するといった、ニーチェに淵源を求めうる区分にも重なり得て、これは二〇世紀知性史に通底する理論的問題に逆戻りする^{*29}。そのうえで以下、1. 変化と不変。2. 一次元的線条性と二次元画像。3. 条理空間と

平滑空間の区別に、踏み込みたい。

そもそも変化と不変とを二項対立として把握する限り、上記のジレンマは乗り越えがたい。流転してやまない万物と、それを把握する固定した法則や定式を志向する「理論」とのあいだで、葛藤が解消されることは、それこそ「理論」的にあり得まい。インゴルドに「不変を変化の対極に位置付け」ようとする二項対立志向の傾向を認める野中氏は、ライプニッツ *Leibnitz* についてラッセル *B. Russell* が述べる言葉を引用する。「変化は、変化する何かを含意する」*something which changes*。つまり「変化は、それが変質するなかで、その同一性が保たれるような基体を含意する」と。野中は「変化下での持続」*persistence under change* を説くギブソン *J. Gibson* を再評価する(564)。たしかにこれは、それとして極めて健全な見識だが、ギブソンの提唱する *affordance* の追認に留まるのでは、事態の打開はありえまい。

思うにドゥルーズの『差異と反復』は、ライプニッツにも目配せする一方、ストア派の議論に遡り、このアポリアを乗り越えようとする試みだったはずだ。十分な哲学的論証には、集合論や無限小に関する数学基礎論に踏み込む必要が生じるため、ここでは割愛するほかないが、煎じ詰めれば「同一性」は、「差異」のなかに「喪失」として事後的に認知される「権利問題」ではない。ここからは神学的な議論も加わるが、もとより単体の「一者」は自らが自らと同一であることを認証する能力や根拠そのものを欠く。「反復」がそれとして認知できるの

は、そこに「差異」が認められる限りにおいてのこと。ここで、インゴルドのいささかならず過度に楽観的な「ともにある」とは違って、「距離を取った観測」という条件が再帰を果たす。なぜなら距離のない流れのなかでは、我という「自覚」そのものも覚醒はできないのだから。⁽³⁰⁾

六 燃りなす時空——能動でも受動でもなく

この点が、次に網状組織の相互連関にかんする問いに結びつく。インゴルドはライン思考とメッシュ構造とに、権力関係には巻き取られないモデルを牧歌的に期待するが、これは出口顕氏も指摘するとおり、それ自体が虚構だろう。⁽³¹⁾ ここには能動態か受動態かの対立に拘束された思考の限界が露呈する。だが西欧近代が抹殺した「中動態」は、無人称の行為がそれゆえにひとしれず権威へと変身を遂げる機構を託された voice すなわち「態」にして「発声」による権力行使だった。都合、メッシュネットワークは些末な区別に過ぎず、両者のあいだには、観察上の視点の違いから結果する「差異と反復」しかない。そもそもフランス語の *rescau* には、意志的構築か自生的な錯綜かの区別はない。結果的に成立した網状組織は、あたかもそこに原初からならんかの意志が貫徹された目的合理性が備わっていたかのような振る舞いを見せもするが、こうした「後付けの合理化」に、事後の適及的再構成でしかない「仮説的推論」*abduction* と、現場での皮膚感覚としての「即興」*improvisation*

との、時差を伴った「縫い」「絡み」、あるいはより正確には、時間軸に乗る体験と遡及する事後反省との「捩れ」、両者の螺旋が紡ぐ運動の動態を捉えることができるのではないだろうか。⁽³²⁾ さらに、映像人類学や視覚文化論への対抗上、インゴルドは線条性の無限開放運動にひたすら拘るが、二次元上の操作を一次元的線条へと還元するのは、いかにも強引だろう。たしかにカメラによる撮影を、静止画像であれ動画であれ、「線描の道具」(307; Note 6: 521)とみることは不可能ではない。だがその結果としての映像をいかに知性が処理するか、となるとこれを線条の論理に押し込むのは、無理だろう。だがインゴルドの考察はこの局面をあえて捨象する。二次元上の任意の複数の点をどのように繋ぐかには、枠組みを撤廃すれば無限の可能性が開けるが、これは、線の自在な延長へと回収しきることほできない、別次元の余剰を抱えている。裏返してみれば、肉筆の線条の延長のうちに記述行為の可能性を託す思考そのものが、音声言語のモデルを無意識のうえでなぞっている。そこには映像を極端に卑下しかなかった文章優位の文化的感性が、インゴルドの自己否定にもかかわらず、なお尾を引いている。

七 表裏なす「条理」と「平滑」空間

それが第三に、条理空間から脱却して平滑空間への回帰を目指す論点の疎漏にも重なる。むしろここでは、先に触れた両界曼荼羅の相補性に注目したほうが有効ではないか。金剛界曼荼

羅は、いわば理論的結晶の集積であり、その定常的な振動のリズムは、デジタル回路を機能させるための必要条件でもあれば、分節化された数理的処理の限界を露呈する兆候でもある。——ちなみに、熟練の職人仕事に「リズム」があり、それが媒体に寄り添う微調整を司ることは、インゴルドも説得的に描き出すところだ(第四章および、261-263, 497)。これに対して胎蔵界曼荼羅は、分節化された数値処理には馴染まない流動体だが、「万物流転」の生態を反映する。

ここで「万物流転」と「永劫回帰」とはあくまで異質で区別する必要がある、とする議論に一言触れておかねばなるまい。物質循環の生態系を無視して、両者の異質性を強調する議論そのものが、例の二項対立の志向に囚われた習癖だろう。先述の通り、「反復」を嫌う進化論的な発展史観は、ひたすら「差異」に注目する傾向を呈する。だがむしろ「差異」を認知するからこそ「反復」が反復として理解される。一方的に「流れ去る」現象のみからなる単体の世界は、自らの同一性を認識する根拠そのものをおぼろげに獲得していかないのだから。華厳教学にみえる有名な比喩だが、滝としての形象の同一性は、それを構成する水流が不断に流転するからこそ、維持される。言い換えれば、金剛界(「滝」と呼ばれる、不動の名詞＝体言的形象)と胎蔵界(水流のえがく動詞＝用言的流体運動)とは同一の現象の表裏であり、「同一」かつ「異質」、言い換えれば「不二」の現象として意識に性起する。

「青山常運歩」とは道元の『正法眼蔵』にもひかれた禅語だ

が、ここで「陸」の固定性と「海」の揺蕩いも、互換性を獲得する(Seaing the Land, 163; 315, 564)。すくなくとも意識に映ずる世界像の次元に限れば、「刹那滅」の瞬時的反復の絶え間ない継続と重層とが、意識上の世界の恒常性を司る。それがヘルクソンの説く「純粹持続」の実態であるはずだ。⁽³³⁾ 「残像」は *phantom/ghost* すなわち幽霊と呼ばれるが、この「幽霊」のお陰で、人は一瞬前の世界が次の瞬間にも持続するという「錯覚」すなわち迷妄を提供され、その余得で自己同一性という幻想を確保し、惰性あるいは慣性の連続性に、無根拠な信頼を寄せ、かくして狂気から保護されている。

八 蟻と蜘蛛と

以上の考察を下敷きとして、編者として最後に、インゴルドがこれも妥協不可能な「対立」として描くアリとクモの世界観の対比を「楽曲」として燃り合わせ、両者に架橋を試みたい。「蟻と蜘蛛の出会い」(第七章)はそもそも冗談として執筆された。ユクスキルをもじって *Antur* にとつての世界を「自然」*nature* ならぬ「アリ界」*antur* と呼ぶなら(112; 222) それを顕揚するのが ANT の Actor Network Theory の 蟻塚 tower だが—ANT の提唱者ラトゥール La Tour は英語に直訳すれば「塔」を意味する—、それに対して、著者 Ingold が金科玉条 gold とするのは蜘蛛の *spider* が *spider* に棲む *Skilled Practice* involves Developmentally Embodied Responsiveness の世

界だ、という駄洒落である(117, 230)。「熟練した実践は発達を通して身につけた身体感受性を伴う」という命題だが、先にも簡略に触れたとおり、インゴルドのラトウールへの批判には、フランス語原文の *réseau* が *network* と英訳されたことに伴う「ズレ」も見逃せない(106, 209)。菌糸の比喩を好むインゴルドに寄り添うならば、むしろ南方熊楠に肖って、粘菌を想起すべきだろう。変形体はゾルとゲルの原形質流動を手段に網状組織を展開して移動するが、生育環境によって多細胞性の子実体を形成する。学術分類にもそぐわない粘菌は、分類学的整理を嫌悪するインゴルドにも相応しかろう。⁽³⁵⁾

蟻と蜘蛛に話を戻すならば、アリの群れが形作るネットワークは事物を組み合わせ、場合によっては地下に巨大な流通網を設け、時にそれは地上に蟻塚と呼ばれる「塔」として佇立する。そこには機材や資源を集約させる化学工場が出現する。他方、クモが自分の腹部から分泌する糸によって構成する網状組織は、クモにとっての感覚器が外部に延長された知覚媒体、振動検知装置の外延部であり、また捕捉された獲物へと接近する場合の経路ともなる。この次元に限定すれば、アリの交通網が集約的な「塔」や「地下茎」をなすのに対し、毎日のように修復され更新されるクモの「網」は発散系をなす。クモによっては自らの糸を風にかざして飛翔に利用し、長大な距離を移動する種類もある。これがいわゆる経路のネットワークキングにはとどまらない多角的な機能を帯びていることは、いうまでもあるまい。

だがクモの作る網状の捕食装置は、これとは異なる次元の役

の「主」よろしく構えるクモ自身の生態、あるいはその営みが形作る構造としての「巢」の新陳代謝—学説史—なのか。⁽³⁷⁾——このような問いに、まだインゴルドの *spider's web* の *mesh* 論は、まったく踏み込んでいない。

九 餌食としての捕食者

「蜘蛛の巣」に陣取るクモは、あたかもネットワークの中心、結節点をなすように見える。これは群れのボスや家族のリーダーなどにも、ある程度妥当するだろう。その周辺には必然的に位階構造や上下関係、権力構造が組み上げられる。観察者や記録者がそれと無縁ではありえぬ事も、この四〇年ほどの脱構造主義や脱植民地主義理論が執拗に教えてきたところだろう。インゴルドはひたすら現場における同伴性に重きを置くが、それで問題が解決されるわけではない。この限界は、⁽³⁸⁾ここまでクモの生態をなぞってみただけでも、すでに明らかだろう。

関係性の結果として、その過程で生成される結節点。その特異性を考えるのに、ここで発想を転換したい。生成ではなく、喪失によってなにが発生するか？ それを問うてみよう。枢要な地位にあり権能を担っていた人物が逝去すると、そこに生じた欠落から、それまで円滑に機能していた人脈や流通網が一挙に崩壊する。見事に組み合わせられていた「動的平衡」の多重活性ネットワークが、ひとつの節が失われることで、みるまに解けて、雲散霧消してしまう——生前にはその人物にそこまでの

割も果たす。捕食用の罌の中心に花模様を装って佇むクモは、場合によってはその目印に獲物を引きつける罌を演じる。粘性のある罌の網は、時に同心円状の渦を巻くが、これは餌食には異としては不可視であることが望まれる。その網は一種の「篩」としての選択的透過性を発揮する。すなわち網の目に比べて小さすぎる対象はやり過ごし、網の目の密度と強度に合致した獲物を捕捉する。巨大過ぎる獲物は網を破壊してしまうため、クモはその補修に追われることとなる。ここで篩の升目の寸法は、特定の理論が何を対象として把握し、何を微小すぎるとして却下し、逆に何を想定外の大物として忌避するか、の計測基準となる。網の目はそれを透過する大気や微生物の流動性を担保しつつ、通過しようとする要素のうち、「有意」な対象のみを検出する。さらに生態学的な見地からすれば、先に触れたとおり、クモは生態系の清掃係をも以て任じている。⁽³⁶⁾

これを物質循環の観点から見れば、どうか。捕食者としてクモは、網を張って誂えものの獲物を待ち受ける研究者の比喩となる。消化した栄養物が糸として分泌され、それが幾何学図形を描き、有効な対象や情報を獲得するための理論の網目、準拠枠をなす。この網にかかった獲物が(人類学なら人類学分野という)学術の研究対象となるが、かかる学術の目的は果たして次の「網」という理論武装を彫琢するにあるのか、次世代へとその学術的遺産を継承するにあるのか。そもそも学術的遺産とは、クモの網にかかる獲物なのか、獲物を栄養として消化した結果編み上げられる「網」*mesh*の姿なのか、それともその営み

凝集力があるなどとは、想像もできなかったのに。「古老がひとり死ぬのは、図書館がひとつ燃えて無くなるのと同じ」(アマドゥ・ハムパティバ)。

ここで仏教の駄洒落を弄するなら、現世の実存から開放されて人は(和辻哲郎の定義する)「人間」であることをやめ、人界から「ほどける」ことで「ほどけ」の世界へと移行し、無人称の存在へと昇華あるいは消化される。あたかもクモの巣に掛かった獲物がクモに消化されて消滅することで、クモの糸へと変貌を遂げ、網目の構成要素へと還元されるのにも似て。ここで「くもの糸」とは、芥川龍之介がその短編で描いてみせた、救済の命綱でもあるだろう。鈴木大拙経由で芥川の原因となった漢訳仏典や、それをさらに遡るバラモンの教えには、世界の運行を司るナーガ龍が自らの尾を口に啜える「永劫回帰」の円環の内部に、ブラフマンとしての蜘蛛が、迷妄の巣を張り巡らす、という図像も知られる(「はじめに」参照)。思えば人類は、自らが開発した *World Wide Web*、地球全球をすっぽりと覆い尽くした *internet* のメッシュに絡み取られて、もはや「ネットワークルマ」(佐々木閑)——欧文脈では「入れ墨」*digital tattoo*とも呼ばれる——の劫罰から脱出することも能わない。自らの頭脳が生んだ電子の「蜘蛛の巣」に幽閉された人類とは、「蜘蛛の巣」の女主人なのか、それとも捕食される餌食なのか？

捕食者かその餌食かも分別不可能な蜘蛛として、網の目の結節点の中心を占めた生体を、他に適切な語彙がないため、とりあえず *agent* と名付けておくことに、もはや格別な障碍はなか

ろう。だがそこに映ずる世界の姿は、冒頭に示唆したとおり、クモの網が適度の湿度に晒されることで、そこに結ばれる無数の朝露にも似た儂い水滴の水鏡、に他なるまい。たまたま枢要な結節点を占めた露は、それなりの役割をメッシュ構造全体に及ぼしすぎるだろう。重すぎてすぐに落下する大きな水滴もあれば、軽いがゆえに長くとどまり、日光を受けて輝く小柄な水滴もあろう。またそれらの連鎖がおもわぬ効能を育む折を見て取ることもできるだろう。「随伴」にせよ「縁起」にせよ、そうした事態を形容する語彙であり、agent³⁹といっても網状構造の場の主導権を握ったり、特権的な支配権を掌握したりする「人格的行為者」を意味するとは限るまい。むしろ超越的な権能は「ほとけ」へと「ほどける」消滅の相において、「成就」されるのだから⁴⁰。さらにここでは行為が「能動」「受動」の相を脱し、いわば「中動態」と化すことにも、注意を払っておくべきだろう。そこでは淫靡な権力構造が無人称の装いを纏って発生することにもなるのだが、その機構については、また場所をあらためて検討したい。

*本章では、本文中にインゴルドの著書の関連箇所を頻繁に表示した。これに加えて出典表記を本文に割り注で入れると、紙面が極度に煩雑となる。このため、出典はすべて、巻末注に書誌を含めて、まとめて記載する。

成果概要…本論集の目論見と論文集の構成

二〇二〇年五月、おりからのコロナ・ウイルスによる感染が猖獗を極めていた時期に、本報告書に結実した研究会は発足した。本研究会のおかれた環境を顧みる縁とするために、まず、この段階での認識を確認しておきたい。^(*)⁽¹⁾

バブル崩壊後の人類慢心のつけ

右肩下がりの経済状況が三十年以上続いてきた。社会構造そのものが大きく変質している。にもかかわらず霞が関や永田町、中央官庁や官邸周辺では、依然として経済成長を当然の前提とした施策・政策を維持してきた。原子力発電を含めたエネルギー政策や、国家予算も、特定の分野を除けば、依然として右肩上がりの設計図を変更できない。高度経済成長期のインフラが老朽化し、列島各地で更新が必要となってきた。その傍らで福祉予算を含む歳出は、人口構成の著しい少子高齢化もあって、鰻登りの上昇を見せている。慢性的赤字財政下、例外的な「特定」分野のひとつに、ほかならぬ研究教育分野がある。この二十年ほど、運営費交付金は毎年一％さらに一・六％の割合で減少を続けてきた。この文教政策が早晩どこかで破綻を迎えることは、常識さえあれば予測できたはずだが、行政当局は責任を先送りにすることで、いままで事態をやり過ぎしてきた。さらに、選挙結果の短期的な金銭的利益に執着する政治現場は、誰の目にも明らかな財政破綻の瀆壺に向かう日本丸の進路変更¹⁾に、必要な舵取りを図ることもできぬまま、目先の利益にかまけて、目を瞑ってきた。

そうしたなかでのパンデミック騒ぎである。経営破綻に瀕して、一日も早くかつての日常への回帰を願う声も切実だが、反対にもはや二度と昨日の世界には戻れない、という諦めもまた顕著となってきた。端的に言って、現下の事態は、短く見積もってもここ三十年、いますこし長いスパンなら、ここ百年ほどの人類の文明史に、地球環境という

名の自然が突き付けた、切実なる忠告ではなかったか。東日本大震災を「文明災」と捉えた梅原猛ならば、ここにより深刻なる第二幕を見たに違いない。事態は、およそ自然の猛威に対していかに人類の知恵がこれを克服・制圧するか、といった旧来の図式や人間優位の価値観では收拾できない。もとよりこの予測に「学術的な論証」など試みる用意はないが、人類の慢心と過剰なる傲慢さへの警鐘にも気づかない鈍感さが、未曾有の試練に直面している。

警鐘としての、恒常的な世界的感染蔓延

地球生態圏の表層を覆う移動手段の発達と、物資流通・金融経済の世界的な相互依存、さらには情報網に顕著な全球化の亢進。それがなにもたらすかの端的な提喻が自然界から齎された。このところ、ほぼ八年周期で人類を襲う、様々なウイルスの世界的蔓延は、人類が成し遂げた「進化」の陰画あるいは因果に他なるまい。にもかかわらずそうした世界的感染を撲滅しようとする姿勢は、端的に言って、自然が我々に突き付けている貴重なる教訓を、読み間違えている。あなたが目指している世界、実現しようとしている現実はこののですよ、と新型コロナ・ウイルスが告げている。それなのに、その現実から目を背け、その事実に見て見ぬふりを決め込むという逃避行動が、「もとの生活の回復」という願望に他なるまい。今後恒常的に、しかしその都度、予期不能なたちで繰り返し襲ってくるのが確実な危機の、いたって柔和な予行演習の機会を与えられながら、それに気づかない愚昧を犯すならば、これは現世人類が後世に対して犯す致命的犯罪となろう。

いうまでもあるまい。こうした世界的感染の条件を怠りなく整え、やや大げさに言えば種の絶滅の危機までをも準備したのは、ほかならぬ人類自身の知性にほかならない。水の惑星の表層をオブラートにも劣る脆弱な薄膜で覆っているに過ぎない生態系、海洋と大気を主成分とする循環系によって生存を保証されながら、その微妙な動的平衡を、一世紀足らずの短期で限界まで追い詰めるに至った人類。Homo sapiens は、大気汚染、核物質拡散さらには合成樹脂素材などの汚物の垂れ流しによって、地球誌において「人新世」という薄っぺらな地層年代を形成したのも束の間、いまや着実にその絶滅への過程を辿っている。謂うところの pandemic は、その野放図な「文明化の過程」の、偶発的な副作用などではなく、むしろ「本質」を、その下手人に対して容赦なく突きつける「凶星」ではなかったか。

人類文明史の折り返し点

政府諮問の専門家会議が、「新型コロナウイルスとともに生きるあらたな世界」を提起したことは、一定の見識を認めてよいだろう。健全への回帰は、もはや昨日の虚栄に戻ることでありえまい。地球生態系の限界を見据え、可能な退路、失業が生活破綻を招かない社会を制度設計できるか否か。そこに、二一世紀中葉までの人類の残存にむけた企ての成否が掛かっている。これは誇張ではない。苟も「人間文化研究機構」を名乗る学術法人、「国際日本文化研究センター」を自負する機関であるなら、学術刷新の視野に立ち、社会構造の再編成・組み立て直しに向けて、聊かなりとも有効な人文知の指針を示し、もとより微力ながら、できる範囲の社会貢献を果たすことが、設立の使命への忠誠の証とはいえまいか。

事は、国家予算の組み換え、製造業の利潤拡大路線の廃棄、架空金融資本の暴走是正、観光飲食産業の回生、失業対策事業や福祉・医療体制の再設定など、社会万端に及ぶだろう。もはやいままでの社会常識は通用しない。三・一一の折同様、危機こそが好機を孕む。だが変革への契機は早急に失われる。惰性の日常への復帰は、状況をさらに悪化させる。もとより大言壮語の誇大妄想は、本意ではない。塊より始めよとの言葉に忠実でありたい。

*

①まず大型予算を獲得しての壮大なプロジェクト型打ち上げ花火は、もはや時代錯誤だろう。右肩上がりの発想の残滓だからだ。むしろ商業的な利潤とも無縁で、国家の財政援助の増額も期待できない低資産・低消費の下で、いかなる研究が裨益するのかの問い直しが不可欠となる。航空機産業の莫大な浪費に利する国際的招聘や旅費負担は、今後もはや期待できない。電子通信網により、対面会議に代替する試みが、この間急速に進展した。行政の要請による煩瑣な委員会乱立も、緊急事態に際して最小限に抑える技法が急遽模索され始めた。あらたな国際的研究への日常の基礎を、そこに据え直すことが期待されよう。

②だが次に、ここで活用される電子通信網そのものが情報 pandemic を惹き起こしている事実も、看過できない。悪性ウイルスが現在演じている生物学的な危機は、実際にはすでに電子情報の配信網において先行して慢性化しており、それは日常茶飯なサイバー攻撃などにより、仮想現実 virtual reality の真実を穿ち、猖獗を極めていく。ネット中毒という蜘蛛の巣に囚われた現代人は、無限の情報への access を得られるとの幻想と裏腹に、無明の窒息を日々経

験し、知的な人工呼吸器に縛り付けられている。電子機器の主人たるどころか、日常の業務の大半は、反対に電子機器の従僕となる隷属状態へと劣化を遂げている。

③となれば、電子機器や人工頭脳には任せられない領域の再評価と復権とが急務となろう。それは安易な神秘主義と結託した「東洋の復権」などとは無縁だが、しかし西欧近代の価値観が抑圧し、その視点からは、いわば座標軸上で直交しているために、認識のうえで盲点となり、数値計測から脱落してきた hidden dimension への探求に誘う。それは妄想ではなく、むしろ昨今の脳科学が垣間見始めた未知の領界に結び付く。仏教も含む身心修行には、この次元への豊かな経験が蓄積されている。だが従来の科学は、ともすればこの身心内奥に潜む次元を「論証不可能」を口実に、意図的に回避し、端から見下してきた。

④こうした視点は、学術や教育の再定義とも無縁でない。一方で電子機器による記憶の代替や big data 解析技術の進歩は、従来の教育で必須とされてきた頭脳による知識蓄積の意義を、根底から覆す。膨大な暗記を要求する現在の入試制度が、もはや時代錯誤な過去の遺物であることは、明白だろう。三十歳までの年月を費やして体得した筈の学術技能も、明後日にはもはや不要で無益な残骸へと変貌を遂げる。となれば次の世代に贈与すべき知とは何なのか、今や、知の授受と教育の常識を原点から問い直すことが急務となっている。

⑤それは、産業界の需要を見越し、社会の要請に応ずる computer literacy の涵養、といった、近視眼的な目標とは、もとより次元を異にする。周囲が期待するところに忠実に、出来合いの模範解答に飛びつく如才なさが「秀才」の定義であるならば、今後期待される知の哲学は、そうした「秀才」像を裏切るだろう。それは従来の試験制度による学力評価の基礎を、社会的に無効として葬り去るだけの、抜本的変革への着手を、要求するだろう。

⑥科学技術の革新を牽引してきた価値観そのものの屋台骨が揺らいでいる。となればそうした技術革新に頼り、それを肯定する学術それ自体の有効性も、もはやそのままは認めるわけにはゆくまい。自然を技術によって征服するという人間存在の生態学的限界が、未知の疫病の世界的蔓延や、気候変動ほかの要因によって、白日の下に晒されている。人類がおめおめと滝壺へと呑み込まれないためには、発想の転換によって舵の向きを転じるほかあるまい。人類はおそらくは創造主によって、短命な指標化石に終わることを運命づけられて設計された被造物だろう。なお五十億年程度の寿命は見込まれる惑星・地球に人類後に出現するだろう知性に対して、恥じることなき屍と遺蹟を残すことこ

そが、人類の果たすべき義務でもあろう。大袈裟でなく、人類の歴史は、今その準備の時を迎えている。^{*(2)}

以上のような前提・準備的素描を踏まえて、共同研究会「蜘蛛の巣上の無明」電子情報網生態系下の身心知の将来」が発足した。これは二〇二〇年から改めて実施することとなった、編者・稲賀による、国際日本文化研究センターに於ける、最後の共同研究であった。

論文集の構成と編者による寸評

その後二年半を経過して、コロナ禍はなお終息をみていない。本研究会そのものも、その影響を受け、対面での研究会実施は叶わず、二年間の遠隔電子通信による会合を数回催したのみで、期限を迎えた。各会の研究報告者とその題名は、巻末資料のとおりである。そこからも判明なとおり、編者の国際日本文化研究センターからの退任にともない、研究会会期もその後一年間に限定されたため、共同研究員のうち、きわめて限られた方々からの口頭報告を得ただけで、成果論文集を編集する事態となった。またそれに先立つ二〇二一年九月に計画した国際研究会集も、所内の共同研究委員会において同意が得られず、組織することは叶わなかった。そうした経緯ゆえ、本研究の成果報告論集では、必ずしも所期の目的あるいは期待を達成することができていない。反省を込めてその欠陥を指摘するとともに、以下、寄稿頂いた論文について、編者としての将来への希望をも込めた展望を付記しつつ、本論集の構成について、概観したい。あわせて、「蜘蛛の巣上の無明」という問題意識に託したものの、まだ実現への道半ばにとどまる課題にも触れておきたい。

序論

冒頭の序論では本研究の構想を、編者・稲賀が略述するのを受け、鍵言葉のひとつ「無明」の依ってきた来歴を、打本和音が仏教学の立場から解き明かす。無明の闇の裡に編まれる蜘蛛の網目は日の出とともに朝露に輝くが、夕闇迫る刻限には廃墟へと崩折れる。そこには捕食者とその餌食との食物連鎖が循環して演じられ、網目の地と絡まった図との表裏なす新陳代謝の交代劇が、寂光の薄明に浮かび上がる。それがまたヒトの世界認知の縮図であり、理論と

事実との相互依存の連環をなすことに、本論集はおいおい論及してゆくこととなる。

第I部「想像力」

冒頭の橋本順光論文は、知の織物として蜘蛛の巣を謳う詩句が洋の東西を跨いで呼応する様を、新大陸と旧大陸との文学創作上の交通・共振にも目配せしつつ喚起し、ラフカディオ・ハーン・小泉八雲から種田山頭火に至る。本論文集は蜘蛛を巡る詞華集を目的とはしないが、蜘蛛の糸がいわば惑星地球を縦横に結びつける動態には、細心の配慮を巡らしている。

つづく平芳幸浩論文は『攻殻機動隊』を題材に、情報ネットワーク上に発生する「ゴースト」とはなにかに迫る。情報理論がひたすら排除しようとした「幽霊」に、電子記号の奔流と生体との合流点が生起する。電子情報の脳内汚染は同時に個人がネットの網の目の裡に無限へと発散する契機でもあり、両者を繋ぎ止める場としての身体は非物質へと蒸散する。

ここで藤本憲正の第三論文は、デジタル回路には回収できない「生命」の連鎖に着目し、「テッポウユリ」の球根の世界的な流通に話題を絞り、プラントハンターを軸とした植物の移植の現場に測鉛を下ろす。キリスト教の復活祭の需要に、日本からの供給が歓迎された。宣教活動もまた世界の表層に蜘蛛の巣を張り巡らせ、全能と無の弁証法的対話を惹起する。

そうした無限と無との交差に注目するのが、近藤貴子の草間彌生論。クサマの水玉と網目とは、ひそかに「蜘蛛の網」に宿る水滴において集約されていた。作品は個としての藝術家と世界との接点に発現し、壊れた捕虫網よろしく、抜け殻の残骸として軌跡を描く。罫にかかった餌食と網と、身体毀損と無限の蕩尽贈与とに、心身のvulnerabilityが露呈される。

網構造は、その実体よりも、むしろそこに穿たれた無数の空隙に意味がある。糸永・デルクール光代のコラムは、嫌われ者の蜘蛛に我が身を託す亡命者、ヴィクトル・ユゴーの周辺に詩想を巡らせ、橋本論文に補助線となる糸を投げかける。白石恵理はアイヌ神話に現れる蜘蛛の女神に託して、「語り」の糸が広げる交流の網の目に関する近年の詳細な情報を提供する。さらに許躍焯は中国の伝統文化における蜘蛛の表象に遡りつつ、それが現代のサブカルチャー

1にいかにか転生を遂げているかの現場を垣間見せる。流離・辺境・周縁といった逆境を位相転換する価値観の転倒が、蜘蛛の形象を媒介として成長を遂げる——その生態も如実に触覚される。

第II部「研究方法論」

第二部では、学術方法論の刷新において「蜘蛛の巣」隠喩が実際にいかに活用できるかの実験を志向する。冒頭のプランドン・ゴウランガ・チャラン論文は、南方熊楠が『ラーマヤナ』への関心の触手を伸ばす手法に注目する。熊楠の学的貢献は、大英帝国が世界に張り巡らした蜘蛛の巣状の情報ネットワークの、極東における或の特異点をなしかつ閉じた体系性を横超する連鎖生態系が、熊楠ならではの「腹稿」をなす。原典遡及ではなく派生増殖の「粘菌」型知性である。

つづく村中由美子はマルグリット・ユルスナール『黒の過程』に踏み込む。刺繍と水郷の都・ブリュージュ。その過去の地図が織りなす網目の「地」のうえに登場人物の運命が「図」を描き、囚われの主人公と審問官や行政官との「牢獄巡り」の綾や主客転倒、それと知られず「個」に潜む「多」、餌食を捕らえつつ日々更新される罫網に、過去から未来が見事に投影される。

さらに松村薫子「妖怪」はどこに棲む?」では、妖怪が今日の電子回路に逞しく繁殖して、それが養育の現場で役立っている様子が活写される。虚構世界が現実界へと越境し、「鬼から電話」を通じて、幼児体験に刻印される。かつては恐怖を植えた「鬼」が、今や「褒め」「励ます」役割を担う。この変容は、子供の成長につれ将来どうなっていくのか。

飯窪秀樹は戦前の日本人海外移民事情を、実証的に分析する。北米からブラジルへの移民が満洲に転じた経緯と現場での軋轢が、中心人物・永田稠の事績を軸に、詳細に検討される。ブラジル体験に基づき現地人労働力導入を説く永田の論調は、日本人自作農による開拓を旨とする軍部や農商務省の方針とは相反するものの、植民地経営の枠を逸することはない。

なお飯窪からは南米で、鉄道敷設と相まって文字通り蜘蛛の巣状に発展した日本移民コロンビア膨張を鳥瞰するコラムを得た。これはアマゾン流域の航路開発と移民入植に関する根川幸男のコラムと両輪をなし、南米における移民政

策の動向を巨視的視野に展望する。

植民政策は、同時に動植物の移植や外来生物の侵入をも招く、世界大の蜘蛛の巣網をなす。春藤献一は、芥川龍之介『蜘蛛の糸』を枕に、セアカゴケグモに纏わる案件を考察する。この外来生物については、動物愛護管理法の適用対象とするか、外来生物法で対処すべきかで議論があった。編者の私見となるが、そこには、折からのオウム真理教事件も影を落としていた。水際での検疫浄化は、皮肉にも、カルト集団の選民思想と通底する。その実態が行政や立法の争点に露呈する。いわばクモが試金石となって、ヒトのご都合主義が露見した。

コラムでは、橋本順光が地球表層を覆う「蜘蛛の巣越しの空」の図像学を提唱する。「透かし見」は「aponisme」にも顕著な意匠だが、ポスターや風刺で縦横な展開を見せる。網越しに下界を睥睨し、長い八本の足をもつ蜘蛛は、しばしば近代都市の悪役たる隠喩をなした。蜘蛛の糸は錯綜する電線の直喩、電信情報網の媒体でもある。前川志織は里見宗次のアーカイヴズ調査に立脚し、グラフィック・デザインナーの資料収集・活用の「蜘蛛の巣」状態の網の目ネットワークに、広告産業界と人間関係の縮図を捉え、その軌跡を追体験する。方法論の開発は、第II部を通じて、なお、多くの潜在的な可能性を秘めているものと想定できる。森田百秋はあらためて春藤論文が扱うセアカゴケグモに触れ、谷崎潤一郎『刺青』の「足」に関する新解釈をマンガ ONE PIECE に接続して、蜘蛛の生態に内在するジェンダー問題に及ぶ。

第III部 「生態的社會動態論」

第III部「生態的社會動態論」では、観察対象としての蜘蛛からさらに踏み込み、自らが蜘蛛と化した創作の現場、あるいは現実社会そのものが蜘蛛の巣の網状に展開する生態に肉薄する。「蜘蛛の巣」モデルを対象に投影するのではなく、現場を蜘蛛の巣として捉えたい。

中村和恵は、西アフリカに起源をもちカリブ海に奴隷貿易とともに運ばれた神話の蜘蛛アナナンが『ジェーン・エア』の登場人物を巻き込み、ジン・リースの小説に変身を遂げて蘇生する物語世界へと読者を招く。蜘蛛の巧緻がジャマイカの逃亡奴隷にとって、植民地支配者たちを出し抜くための抵抗の修辞法となる。その計略は本論を読んてのお楽しみ。

富永梨紗子は、米国の画家ジョン・ラファージの日本滞在記の背後に絡み合う人脈と東洋知識の世界伝播を丁寧に紐解く。そこからは「莊子」の英訳が当時の英語圏知識人に与えた甚大な影響の脈絡が、蜘蛛の糸を伝う反響のように鮮明に復元される。本稿は神智学関係者の東洋志向がカンディンスキーやモンドリアンの抽象主義に至った伝播経路をも刷新した。

志賀祐紀は柳田國男の昔話採取を話題に、口頭伝承の蒐集のために柳田が日本全国に張り巡らせた情報網を吟味する。いわば柳田は各地に採取者という名の協力者として蜘蛛を配置し、それを束ねるメタレヴェルの蜘蛛だった。だが忠実な口頭伝承者を探す努力と、活字媒体による昔話の確定とは、原理的に相反する。捕食者の網に掛かる獲物は否応なく変質するのだから。

柳田は郵便という近代装置を説話蒐集に活用したが、それを下支えしたのが鉄道網に他ならない。鉄道運輸が資本経済の死命を制したことは、言うまでもない。竹村民郎は野間宏「歴史の蜘蛛」を導き、一九五〇年代の国鉄を舞台とした文化運動発生の現場目撃者として、品川客車区の騒擾を生々しく再現する。蜘蛛手なす交通網は同時に雇用者側のスパイ網でもあり、特急さくら運行の背後には熾烈な職場闘争が控えていた。「管理資本主義」の実態は、「職場の歴史」を自ら記述しようとする労働者の意識の覚醒あって初めて記録に留められる。ここにも柳田の民話採取と表裏をなす近代社会の「蜘蛛の巣」の生態が把握される。

コラムでは滝澤修身が支倉常長遣欧使節団について、スペイン語圏に残存する一次史料の網目に分け入り、通説の塗替えを提案する。支倉一行が厄介者扱いされたとの従来認識とは異なり、ローマ教皇庁は日本を強大な軍事大国と認識していた筈だ。それが滝澤の見解である。さらに志賀祐紀は、論文の補遺として、柳田が採取した昔話から、蜘蛛の糸に纏わる伝承として「水蜘蛛」を取り上げる。「水の神」をミズグモと直ちに同定はできないが、柳田が「水の神」とヒトとの媒介者として、水中の蜘蛛に関心を寄せた事実は意味深長だ。富永梨紗子はトマス・サラセーノの網状伝播反響作品を例に、身体と都市の共振動揺に迫る。

第IV部 「電子媒体・身体と都市」

第IV部「電子媒体・身体と都市」では、WWWに覆われて変貌をとげた環境に注目する。

その導入として、**新井菜穂子**は交通と通信との「輻輳」に注目する。北斎は飛脚が巨大な蜘蛛の網に足を取られて難儀する戯画を残すが、これは**Web**が描いたネット上の蜘蛛の奴隷となった現代人の肖像とも対比するに値しよう。インターネットの**Web**は、あくまでも流通回路であり、獲物を捉える罫ではなかったはずだが、**Web**はなぜか蜘蛛同様の捕食行動を身につけ、利用者は回路の輻輳に悩まされる。利便性の追求が現在では様々な**Web**の温床となり、人間と機械との境界も揺らぎ、情報検索よりも情動紛糾が優位となりつつある。

そうした電子環境のなかで、身体的な知はいかに伝達できるのか。**鑄物美佳**はこの課題にオンラインでの稽古事の実践記録から接近する。記述言語ではない「わざ言語」、「アウラ」の消失、無分節の意識が身体実践から検討される。以下は編者の勝手な私見となるが、例えば能舞台では演者は自らが包まれる環境に共振する必要がある。仕舞のシテは可聴域の外に広がる低周波・高周波に身体を浸す。これが「アウラ」ならぬ気配だろうが、現時点での遠隔映像音響伝達装置では、この要素は当初から除外される。さらに無分節といえ、主語と述語との分節に馴染まない同化、自己の空無化による心身充実が、稽古事の提をなす。

続く**尾鍋智子**は身体知・実践知の問題について、科学論の立場から**WWW**黎明期の思想へと探りを入れる。編者なりに言い換えると、人工の蜘蛛の巣上に実現される「透明性」「公開性」は身体性を「曖昧」な雑音としてあらかじめ排除した偏頗な閉鎖系をなしており、技術開発者集団もその閉鎖系に幽閉されて、いわば多幸状態の感覚麻痺に陥り、自らの暗黙の価値観がなを抑制しているかにも気づかなくなる。果たして心身は電子媒体に発散できるのか、逆に電子情報は靈性に憑依できるのか。この論点は平芳や鑄物の論考と燃り合わせ、近年の脳科学の知見が直面する臨界とも錯綜する思考実験、さらなる哲学的考察へと誘う。

そこにひとつの突破口を探るのが、藤井聡太の将棋を分析する**多田伊織**。AIによる差し手の演算は、モンテカルロ法の枝分かれから確率的に最良の手を「評価値」として数値化する。だが藤井はAIの最適値推定の裏を掻き、AIが不適切として切り捨てた選択肢を逆手に取る。多田はそこに「謫仙」藤井独特の詰将棋の蓄積と空間認識力とを想定する。編者としては、樹状模型の分岐を別回路で短絡させる妙技に、蜘蛛の巣構造の潜在性を仮定したい。

本論集冒頭に触れたとおり、都市が文化的洗練の温床だったなら、蜘蛛手なす都市構造に**WWW**が折重なった現在の複合環境網に抜本的な再考を加えるべき時機を迎えている。**江口久美**のコラムは都市論の視点から歴史的な鳥瞰

を与え、田園都市を含む都市計画の類型学を提示する。そこに**新井菜穂子**は北京の具体例を添え、**糸永・デルクール**光代は糸を張り巡らす現代藝術家の営みを重ねてみせる。**Text**と**write**は語源を共有する。漢語でも「文」と「彩」さらに「綾」は、日本語ではいずれも「あや」と発音される。自然と文化とを二項対立に裁断するのではなく、自然に被せられた文化がモアレとしてそこに描く「あや」の生態を精査すること。そこにも蜘蛛の巣網越しに世界に織り込まれる体験を定位したい。

第V部 言語論的転回

ヒトの操る分節言語は、語彙と統辞の網の目を世界のうえに被せ、それによって世界を文字通り分節しつつ、主語と述語から構成される認識へと導く。だが蜘蛛の編糸と同様、そこには必然的に空隙があり、一方では網の目に掛からず見損なう微細な対象が生じ、他方では許容寸法を逸脱して言語の網の目を破綻に導き、認識に危機をもたらす事態も頻発する。そこに精神の破綻を経験する言語学者もあれば、そこに発生する詩的言語に驚く詩人もある。

藤貫裕は言語学者ソシユールが晩年に沈潜したアナグラム研究に焦点を当てる。文字列の入れ替わりから思わぬ意味が発生するアナグラム現象は、言語の網目に生じる病態でもあれば深層意識の発露でもあり、音声記号の不足と過剰との狭間に不意に露呈する。藤貫はそこにログスとパストとメロスとの圧縮された融合を捉えるが、丸山圭三郎は人工言語の組み合わせ実験で類似した結果が発現する具体例も提示していた。藤井聡太の棋譜はAIの想定を越えたアナグラムの「成功」例でもあろうが、それは脳の病理現象の解明にも通じる。

森岡優紀は「自閉症スペクトラム症候」に観察される潔癖なまでの整理癖とAIの情報処理との類似から、逆に「正常」な成長を遂げた脳の機能にはAIの「秩序」からは「逸脱」した「蜘蛛の巣」状の「錯綜」が潜むことを想定する。編者なりに敷衍すれば、平面には立体の「影」しか投射されず、同様に三次元世界には四次元の影しか映らない。あるいは「定型」の言語は「影」しか感知できない致命的な制約を背負っている。「障害」とは、「健常者」が浸っている「恒常性」や「同一性」に関する常識が捉える「影」の謂だが、実はその「常識」こそが、惰性と慣習との生み出す「迷妄」に他ならない。この逆説は、「蜘蛛の巣の主」には何が認識されていないのかを悟らせる。

平倉圭は蜘蛛とその餌食になる蠅との「対位法」を手がかりに、宮沢賢治の詩的世界における文字の舞踊へと触肢

を伸ばす。蠅は蜘蛛の巣糸の粘性を実感し、蜘蛛は蠅の動揺を触知する。両者は同一の世界を異質な対極で体験するが、そこには或る旋律が共振を始めている。その同期を賢治は「蠕虫」の異種の typography に託したとするのが、平倉の仮説となる。

ここには空海の「蚊行蠕動なんぞ佛性ならん」(『性霊集』)もはるかに木霊しているように編者は夢想するが、賢治の肉筆や特注活字には、異種生物間の魂の交流が踊り、生態系の網目を弦とする楽曲が響いている。ティム・インゴルドの『ライン』をも導きの糸とするこの論考に誘われるのが、編者による最終論文だが、これについての言及はここでは差し控える。

付随するコラムでは、鈴木洋仁が社会科学理論に着目し、期待あるいは予期の軌道が「蜘蛛の巣」の網生成に託された形象を結ぶことを確認し、liquid modernity と「蜘蛛の巣」仮説との親和性、あるいは相互の密かな「障害」と「共振」とを触知しようとする。

論集を締めくくる君島彩子は 30 没後にリリースされた楽曲「ピנקスバイダー」を話題に、「死」という空隙が、追悼の営みのうちに網の目状の連鎖を生成し、生死を跨ぐ「フルイ」と「シズメ」の霊振りを惹起する現場に肉薄する。音曲を通じた「輪廻転生」の伝播の余波は、語り手その人の実存にも抜き差しならぬ網の目を張り巡らす。観察者とその対象とが記憶のなかに交錯し、期待と想起とが循環する巴を描く。蜘蛛の糸とその描く紋様のうえに偶々吹き寄せられた落ち葉が、混然となって、「中動態」さながらの主客相互依存の「縁」をかたちづくる。そこに、本論集が目指した「無明」から発する「寂光」を感知したい。

【注】

- (1) 「パンデミック」は何の予兆なのか？―身近な「悔い改め」への舵取りのために」は、国際日本文化研究センター広報誌『日文研』に投稿、六五号、二〇二〇年九月刊行、三六一―四一頁。この文章が本研究会の下地をなすため、以下に再録する。
- (2) 以上については、二〇二〇年五月十五日段階の執筆である。

あとがき

編者は一九九七年より二〇二〇年まで国際日本文化研究センターに奉職したが、その最後の「貢献」となるべき本論文集は、それに値する達成を成し遂げたとの社会的認知を期待するには、なお程遠い水準にとどまっている。なによりもまず時代が変貌を遂げ、もはや三十余年前の「日文研」創設時の理念、「国際性」「学際性」「総合性」の探究は、今日の世相や学術に対する社会的期待とは合致しない。社会的有用性や効率的即効性の期待できない学術を探究するといった理想は、もはや時代遅れな夢想へと色褪せてしまった。不要不急の事業に割く余裕を、日本社会も世界も、すでに致命的に喪失してしまっただけである。だがそこには、大きな陥穽が控えており、それへの対応は、すでに遅きに失している。そうした認識の一斑は、先立つ◆「成果概要・本論集の目論見と論文集の構成」の冒頭に記したとおりである。編者として本論文集に期待した意図を、些か大袈裟ながら、こうして「遺訓」として残すことにより、「あとがき」に代えさせていた、次第である。

なお、「蜘蛛の巣」の編糸の本性として、そこには意図した獲物ばかりが捕獲されるわけではない。狙った対象を逃す場合もあれば、逆に意図せぬ大物が引っかかって、網そのものが壊れてしまうことも、頻繁に発生する。本編著は、方法論として、その実験的な結果報告も兼ねる。捕らえたのは良いが、手を持って余す相手と判明する場合もあれば、蜘蛛の糸の生感に、餌食のほうに捕食者よりも遙かに鋭敏な理解を示す折節もまた、珍しくはない。もとより何が掛かるかわからない捕食網では、trophy displayを試みても、ひどく不揃いな展示となることも避けがたい。だが偶然の吹き寄せは、そこに集まった収集品たちが密かにもっていた互いの親和性や異質性を際立たせる縁ともなり、それが結果的に、展示の舞台となった蜘蛛の巣の特性や、その(女)主の性向や正体を暴く効能を発揮する余得もありえよう。

特定の目的を設定し、それに向けて合理的な計画を立て、予定された道程を踏破することで、目標を達成する。

——かような合目的 zweckmäßig な学術研究が、すでに袋小路に陥って居ることへの告発も、この常軌を逸した共同研究がそもそも念頭においた企ての一端である。案の定、そうした無謀な計画が科学研究費補助金事業の採択案件となる状況など、期待するほうが非常識であるに違いない。とはいえ、対象を限定するのではなく、異分野の方法を仮初の「蜘蛛の巣」のうえに展翅して、そこにしばし思索を巡らす有閑すらも、反社会的行為として糾弾されるようになれば、それこそ蜘蛛を檢察官とする管理社会の悪夢が、現実のものとなりかねまい。予期される獲物ばかりを予定調和で把握する「通常科学」に潜む循環論法の盲点を再認識することもまた、「蜘蛛の巣上の無明」に期待される営みなのだから。

*

本論集の編集に際しては、松井美苗、春藤猷一、打本和音の三氏から惜しみなく頂いた、献身的なご尽力に負うところが大きい。研究会に集い、貴重なご寄稿を頂いた執筆者の皆様にも、この場を借りて、御礼申し上げます。コロナ禍のもとでの、大学や研究機関、さらには社会全体を覆う閉塞や悪化する一方の研究環境、さらにはウクライナへのロシア侵攻に伴う様々な障害は、この論集刊行にも無視できない影を落としている。年度末納品などの単年度予算の場合に関わる日程上の逼迫から、当初ご寄稿を希望されながら、本書へのご論考収録を果たせなかった方もある。

そうしたなか、カヴァーと本扉には、君島彩子様から、編者の意図を満たすところか、それを遙かに凌駕する見事な作品のご提供を得た。また白石恵理様には、編者の手の回らない繁忙状況から、校正の全般にかたじけないご助力を賜った。戦暁梅様には原稿の中国語訳をお願いし、コーディー・ポルトン先生からは編者英語原稿に斧正を頂いた。さらに、末筆となり恐縮だが、大部で売れ行きなど元より期待できない論文集の刊行を、採算度外視で快諾してくださった花鳥社の橋本孝社長、編集担当の大久保康雄氏の周到綿密なお仕事にも、長年のご友誼への御礼も含め、改めて深謝申し上げます。

二〇二二年十一月二十五日 京都洛西にて

編者 稲賀繁美

Avidya on the Spider's Web

In Search of Psycho-somatic Ethics in the Age of Meta- and Multi-verse

◆ indicates columns.

Preface INAGA Shigemi i

Introduction: On the Conception of the Present Volume

What is Emanating from *Avidya* UCHIMOTO Kazune xvii

Part I Imagination: What the Spider's Web Evokes

Representations of the Spider as Artist: Poetics on the Microcosm of
the Spider's Web HASHIMOTO Yorimitsu 3

The Ghost on the Cobwebs HIRAYOSHI Yukihiko 13

Consuming the *Lilium Longiflorum* as "Easter flower": A Short History of
Bermudian and Japanese Bulbs in the USA FUJIMOTO Norimasa 25

Net Holes as the Path to the Infinity and Beyond: Re-Exploring the Correla-
tion between Yayoi Kusama's Nets and Polka Dots KONDŌ Takako 38

◆ Threads as Communication Medium: From the Dialogues with Contempo-
rary Textile Artists in France ITONAGA-DELCOURT Mitsuyo 51

◆ Future of a "Symbiotic" Society on the Spider's Web SHIRAIISHI Eri 55

◆ Representations of Spider: From Chinese Traditions to Contemporary
Sub-and Popular Cultures XU Yuewei 59

Part II Research Methodologies:

In Search of the Renewals of Study Fields

Minakata Kumagusu and the Spider's web: With a Focus on his Rhizomatic
Approach to Knowledge Gouranga Charan PRADHAN 65

Method and Reflection in *The Abyss* of Marguerite Youcenar
..... MURANAKA Yumiko 71

Where Do "Yōkai" live?: Yōkai Culture in the Internet Era
..... MATSUMURA Kaoruko 82

Should We Respect The Spider's Life?: The Relationship between "*Aigo*"
Culture and Animal Management SHUNTŌ Ken'ichi 91

A History of Migration from the Perspective of Cobweb Structural Connection: Continuity of Nagata Shigeshi's Immigration Business View IKUBO Hideki 101

◆ Development of Japanese Emigration in the North-Eastern Region of the State of Saõ Paulo, Brazil IKUBO Hideki 112

◆ The Sky through a Spider's Web: Iconography of Spiders and Wires Covering the Sky HASHIMOTO Yorimitsu 115

◆ The Spiderweb like Thinking through the Archival Materials by Graphic Designer Satomi Munetsugu MAEKAWA Shiori 122

◆ Man-eating Spider and the Fascination of the Eight-legged Creature MORITA Momotoki 127

**Part III Ecology of Social Dynamics:
Validity and Limits of the Cobweb Model**

Transatlantic Cobweb of Anancy the Spider: Jean Rhys's *Coloured Slanderer* and His Nancy Story NAKAMURA Kazue 133

John La Farge and the Web of Translations in Eastern Thoughts: Chuang-tzũ Translated by Herbert Allen Giles in "An Artist's Letters from Japan" TOMINAGA Risako 146

Yanagita Kunio's Folktale Collecting Project: From the Perspective of Information Network Construction SHIGA Yuki 158

Japan in the 1950s Revisited: Looking Back Noma Hiroshi's Poem 'Spider of History' TAKEMURA Tamio 169

◆ A Reconsideration on the Keichõ Delegation TAKIZAWA Osami 181

◆ The Spider's Thread in the Folk Tale "Kashikobuchi (Water Spider Story)": Thread as an Information Network SHIGA Yuki 191

◆ Steamship Navigation Route as Spider-web in Amazon River and Japanese Immigration NEGAWA Sachio 193

◆ Installation by Tomás Saraceno, *in orbit* (2013) TOMINAGA Risako 196

**Part IV Digital Media, Body and City:
Light and Shadow of Cobweb Internet**

Congested Traffic and Communications on the Spider Webs ... ARAI Nahoko 201

How to Teach Bodily Technique?: Possibility of Bodily Skill Through the

(Im)possibility of Online Teaching IMONO Mika 214

Assumptions behind the Web: Problem of "Normal Science" and Alienation ONABE Tomoko 224

A Radical Innovation in Shogi Procedures Using AI, as if Spinning a New Cobweb, by the Youngest Shogi Master, Fujii Sõta TADA Iori 236

◆ The Spider's Web Cities: Perspectives on Urbanism EGUCHI Kumi 249

◆ Beijing: City Surrounded by Walls ARAI Nahoko 253

◆ Victor Hugo and Spider Webs ITONAGA-DELCOURT Mitsuyo 256

**Part V Linguistic Turn: Beyond Brain Science and
Neurological *Bildwissenschaft* ?**

Langue as Spiderweb and Its Interpretation by Maruyama Keizaburõ FUJINUKI Yũ 265

Spider Web and Cognition: Reading Autobiographies of Persons with Autism Spectrum Disorder MORIOKA Yuki 275

Typography of Other Species: Miyazawa Kenji's "Annelida Tänzerin" HIRAKURA Kei 286

On the Validity of Spider-Web Model: Reflection on the History of Scholarship INAGA Shigemi 299

◆ Cobweb Cycle and Expectation SUZUKI Hirohito 311

The Pink Spider's Threads KIMISHIMA Ayako 314

Postface: What is Lying beyond the *Avidya* of Electronic Spider's Web INAGA Shigemi 321

Supplementary Documents

Stationary Nomad: On the Questions on the Psycho-somatic Ethics in Virtual Realities in the Age toward Post-Nation-State World Systems INAGA Shigemi 21

Japanese Studies Expanding in the Networking of Spider's Web INAGA Shigemi 31

Touching on the "Spider's Web": Overlapping and Encompassing the Fringes of the Pacific Ocean and Multitude of Islands INAGA Shigemi 42

Chronological Table and Contents of the Research Meetings 46

Summary

Avidya on the Spider's Web

In Search of Psycho-somatic Ethics in the Age of Meta- and Multi-verse

INAGA Shigemi

Avidya is the negation of knowledge or learning. Ignorance leads to doubt. "Stray sheep" in Christianity is literally "in astray" in the *avidya*. One may recall that to "go astray" is famously linked to "error" by Martin Heidegger... The present volume starts with the assumption that the human species is now trapped in a huge spider's web which we call World Wide Web. In ancient India, the spider occupying the center of the cobweb is trammings threads of illusions *-maya-* in which we are caught. In Japanese "spider" and "cloud" happen to share the same pronunciation: "kumo." The knowledge shared by the "crowd" is now entrusted to the "cloud" (again the same pronunciation in Japanese-English; "kuraudo") floating on the air of the WWW system. Victor Hugo in exile looked up the sky and the floating cloud through a spider's web. Friedrich Nietzsche, talking of the *Eternal Return*, did not fail to mention a spider at night. Sure enough that he was secretly referring to the Indian idea of "Maya spider," the mistress who presides over the world of knowledge as illusion and "*prisonnière*" of the web she has spin by herself in the circular realm which the *Uroboros* encloses by eating its own tail. And Marguerite Yourcenar—her pen name being based on anagram—, left in 1982, *Le Tour de la prison*, mainly treating her voyage in Japan.

Guided by such literary and visionary imaginations, the papers collected in the volume investigate into this "Prison" of the spider's web. The **Part I** invites the readers to follow the ramifications of spider's web which covers the world literature. Comparative literature relates to the *Tour du monde* by plant-hunters. Christian missions all over the world also developed the web on Earth. Contemporary artists also refer to spider's web in search of infinity and self-obliteration. The Digital network, in the meanwhile, cannot be free from the "ghost," a noise which the information theory wished to get rid of, in vain... and which is now metamorphosing into avatars in the multi- and meta-verse. The range and width of the cobweb as metaphor and symbols are thus put into the focus.

Then, how to make an investigation into this cobweb? **Part II** proposes methodologies in research. Ecological thinking calls for kind of networking which happened to be provided by the Imperialism and Colonialism at the end of the nineteenth century. The expansion of the Japanese emigration to Brazil was no exception and Japanese exodus to Manchuria changed its destination in the 1930s. The mesh of transmitted information as well as the mass of deported population in slavery also challenges a mechanical cause-and-effect- type centrifugal politics and philology. It is rather the Centers (metropolis in Empires) which are affected by the Peripheries (regional colonies). Here the relationship between the predator and its victim turns out to be ambivalent and mutual dependent. Animals also cannot always act in subordination to human beings. Such upside-down reversal questions conventional methodologies of academic approach. Further, it turns out that the imaginary creatures like *yōkai* (like the giant spider, *Tsuchi-gumo*) are now making their intrusion into the real world of children's daily experience through internet. Entangled in the spider's web-like traps and snares, iconography and archival researchs also reveal the necessity of renewal in documentation methodology.

Instead of using the spider's web as a target of observation, **Part III** proposes, therefore, to grasp the ecological social dynamics as a living economy of the spider. The spider here is no longer a model to be projected onto the reality. Rather, the reality constitutes the spider. Indeed, spider from the African mythology crosses the Atlantic Ocean so as to provide the Caribbean slaves and their descendent with the tactics for their survival. The propagation of Chinese classics of Taoism also testifies to its impact in the West for the spiritual awakening. The lines of transmission are reconstructed as if tracing a spider's thread. The collecting of the oral tradition by folklorists also incarnates the cobweb system in modernizing society. It inevitably reveals a fundamental dilemma of trapping living orality so as to engrave it onto the tombstones of written definitive editions. The same is true of the railway network. The state-run capitalism, with its elaborated spy network, could not help providing, as a side effect, the seedbed for the awakening of the labor's consciousness. Japan's Christian delegation to the Vatican in the seventeenth century, as well as the contact of human species with the unknown "divinity in the water" in folklore, pinpoints the circumstances in which the conventional perception of order of things is suddenly toppled down as if caught by an invisible spider's web.

This leads to **Part IV**, which focuses on the contemporary urban environment in which the relation of body and the city has been drastically modified with the overwhelming predominance of the digital media. The history of urban planning and several examinations of the *status quo* of the *asteion* serve as the starting point of the problematics. By definition, the internet is a circuit which should contribute to an easier and faster flow of data and information. Yet, in reality, it frequently causes unexpected congestions, hindering the smooth connection. Like the cobweb, the W.W.W. captures us as if we were its preys. The S.N.S. causes more emotional troubles, —hate, fear, malice or spite—instead of serving as neutral research engine for the sake of efficiency in searching operations. What are the causes which are hindering psycho-somatic relations? What is wrong with the artificial intelligence? Where did the pioneers of the I.C. technology misunderstand the definition of “intelligence”? History of science, philosophical analysis of the learning through bodily experience, as well as a survey of the top-ranking game players of shogi, provide keys to answer these questions, though the final solution remains still to be awaited in the future.

Part V tries to ramp up the volume in reference to the “Language Turn.” In fact, textile and text share their etymology, and the cobweb could have been the originating model for human digital invention. Human language, defined as based on double articulation, is also a web system. Vocabulary and the semantic field are overlapping the world so as to articulate the cosmos (A. Humboldt) into words which the syntax coordinates into a system consisting of subject, verb, and object, etc. Yet the web of language cannot be perfect, as Thomas Carlyle put it in his *Sartor Resartus*. It is through the crisis of language, by its fracture, that the limit of human cognition is revealed. An anagram may be one of the keys through which to peep into the “wound” of the linguistic web. The Autism spectrum disorder would be another key to discover the still unclarified mechanism of human intelligence.

Just like the broken cobweb, the human-made theories are destined to be refuted and eternally renovated so as to catch the yet unknown truth. Just as the spider is working hard every night to repair or renew its broken web, the human being is also doomed to toil at its daily tasks. We are no longer sure if the spider is predator or the cobweb’s own slave and victim. The Japanese poet, Miyazawa Kenji saw in the interplay between the devouring spider and the trapped fly, a musical *Kontrapunkt* through which two opposed melodies begin to combine in

attunement. Ecological truth of circulation between the eating and the eaten creates the music of life and death. This eternal circle lies as a cradle in the generating of typographical lines of Kenji’s poetical dance of handwriting. A classical theory of social science on the expectation, called the cobweb model, may also be helpful to understand the ecological dynamics of the so-called “liquid modernity” (Z. Bauman). And recent methodological criticism in cultural anthropology in terms of the “ANT vs. SPIDER” controversy (B. Latour vs. T. Ingold), would also bring out the potential of the present endeavor.

The last paper of the volume touches upon the web connecting the life and death. It is in the act of mourning, in the *Actus Tragicus*, that the web intensifies its rhythmical vibration so as to appease the grief of irremediable loss. The Buddha-nature of liberation (*hotoke*) consists of “releasing” (*hodoku* vt., *hodokeru* vi.), rather than accumulating and concentrating. The dialogue with the loved one cannot be achieved either in active voice or in passive voice; a sort of “middle-voice” plays the crucial role. Neither exoteric banality nor esoteric irrelevance, a “*mesoteric*” passage is assured here through the fragile Spider’s Web, in the guise of an imaginary bridge (as is clearly noticed by Friedrich Nietzsche). Can we perceive here the “silent illumination,” which some Buddhists feel emanating from beyond the web of *Avidya*?

【論文・コラム】注一覧

序論

稲賀繁美

- (1) フリードリッヒ・ニーチェ『ツァラストラかく語りき』佐々木中訳、河出書房新社・河出文庫、2015：471。なお、「序論」の、この注引用部に先立つ箇所は、すでに『アステイオン』097号、2022年11月30日刊行に掲載されている。本誌創刊者・故・山崎正和へのhomageを兼ねることを、ここに書き添えたい。今回、学術出版に伴い、細部に加筆を加えたほか、必要な図版を変更した。『アステイオン』編集部に謝意を申し述べる。また本稿を同誌にご推薦いただいた、編集委員の張競氏にも、この場を借りて厚く御礼申し上げたい。
- (2) J. Bollen et al., eds. *Clickstream Data Yields High-Resolution Map of Science*, PloS ONE 4(3), 2009. 以下参照：赤木昭夫 2013：272-294とりわけ282-284。
- (3) この三分野の収斂を視野に、本研究の準備段階での基盤として、その総合的な検討を目指した科学研究費補助金申請書類は、本書巻末に添付資料として収めてある。
- (4) 一般書として、以下を参照する。浅間茂 2022、馬場友希、鈴木佑弥・谷川明男 2021、中田兼介 2019。
- (5) 稲賀繁美 2017：「ナム・ジュン・パイクと仏教思想：「没後10年2020年 笑っているのは誰？ ？+？=？」展より」『あいだ』第231号、2017年1月20日：2-14。
- (6) 提唱される理論への入門としては最適とはいえず、従来の社会科学の問題点の指摘と著者の自己弁護の姿勢が強く、実業界の学術志向に迎合した出版物との批判も多いが、以下を挙げる。Bruno Latour 2005: *Reassembling the Social: An Introduction to Actor-Network-Theory* (Clarendon Lectures in Management Studies), Oxford University Press.
- (7) Beb Goldfarb 2019: *Eager, The Surprising Secret Life of Beavers and Why They Matter*, Chelsea Green Pub Co. 邦訳：ゴールドファーブ 2022。
- (8) 稲賀繁美 2015：「ビージャアのダム——「境界を越えた知識伝播」をめぐる統合的接近法 ゲッティンゲンの会議から(1)」『図書新聞』3228号（連載155）、2015年10月31日。
- (9) Jeffery Hawkins 2021: *A Thousand Brains, A New Theory of Intelligence*, Basic Books. 邦訳はホーキンス、ジェフ 2022：158。本書の定義する「知性」を尊重するかぎり「特異点」は到来しない理屈となるが、これは循環論法だろう。小脳や海馬と大脳皮質とを二項対立的に対比させがちな論点の問題も含め、本書への詳しい批判的検討には、場所を改めたい。予備的考察としては、Shigemi Inaga 2020：“Cultural Gap, Mental Crevice, and Creative Imagination: Vision, Analogy, and Memory in Cross-Cultural Chiasms,” *Journal of Aesthetics and Phenomenology*, London: Routledge, online publication, 18pp.
- (10) 「火付け役」となった書籍としてRay Kurzweil 2005, *The Singularity Is Near: When Humans Transcend Biology*, Viking Adult. 邦訳はカーツワイル、レイ 2007、井上健監訳、NHK出版。またホーキンスの立場とは対極をなし、人知では制御不能な事態の到来を予見する見解として、以下。James Barrat, *Our Final Invention, The Artificial Intelligence and the End of the Human Era*, 2013, Thomas Dunne Books. 邦訳：バラット、ジェイムズ 2015。
- (11) 以下、稲賀繁美「蜘蛛の巣としての電子テキスト—その来歴と現在」Edoardo Gerlini'n, 河野貴美子編『古典は遺産か？ 日本文学におけるテキスト遺産の利用と再創造』アジア遊学261、勉誠出版、2021年10月20日、208-219頁の記述から敷衍した箇所を含む。なお、本稿を発展させた英語原稿Shigemi Inaga, “Textual Heritage in the digital universe of an immense ‘spider’s web,’”がAndre Giolai, Edoardo Gerlini (ed.) *Textual Heritage*, Berghahn Books (仮題)として目下編集中。
- (12) Michael Polanyi, *The Tacit Dimension*, Doubleday Anchor Books, 1966. 邦訳はポランニー、マイケル 2003。
- (13) クモの分解能力の総量測定については、中田 2019：187-188。近年、一般向きの書籍もふくめ、こうした価値観の問い直しが浸透している。顕著な例として、藤原辰史 2019, Marlin Sheldrake, *Entangled Life, How Fungi Make Our Worlds, Change Our Minds &*

- Shape Our Futures*, 邦訳はシェルドレイク、マーリン 2022。
- (14) 「輪廻転生」の循環モデルを「積極的な投企」として抜本的に読み替える作業それ自体がいかに文化交流史上で「輪廻転生」を閲してきたかについての分析は、Inaga Shigemi “Kuki Shūzō and the Idea of Metempsychosis: Recontextualizing Kuki’s Lecture on Time in the Intellectual Milieu Between the Two World Wars,” *Japan Review*, no. 31, International Research Center for Japanese Studies, 2017, pp. 105-122. を参照されたい。邦訳は稲賀 2022。またそれを西欧文化史の理論構築と交差させる試みは、Shigemi Inaga „Weg (Dō) – Rahmenlosigkeit – Verlauf: Eine Reflexion auf ‚Japanisches‘ in der Kunst“ in: Yasuhiro Sakamoto, Felix Jäger, Jun Tanaka (Hrsg.): *Bilder Als Denkformen: Bildwissenschaftliche Dialoge Zwischen Japan Und Deutschland*. Berlin: De Gruyter, 22.Juni.2020, pp. 127-144. 邦訳は、稲賀 2019、およびDidi-Huberman, “Image survivante”と交錯させる試みは、稲賀 2006。さらにその理論的展開としては、稲賀2019-b、稲賀 2021も参照。
 - (15) SDGs に対する根源的な批判としては、稲垣論 2022。
 - (16) 「地球=水洗便所説」は、梅棹忠夫の実現しなかった企画に見られる構想。以下参照：稲賀「梅棹忠夫「知的先覚者」の善用のために：国立民族学博物館「ウメサオタダオ展」より」『図書新聞』第3022号（連載125）、2011年7月16日。

稲賀繁美

- (1) ティム・インゴルド『生きていること 動く、知る、記述する』（柴田崇/野中哲士/佐古仁志/原島大輔/青山慶/柳澤田実訳、左右社、2021年11月10日刊）。なお本書については、より早い段階の書評が、稲賀「人類学的思考」と、「東洋/日本哲学」との斬り結びの可能性にむけて」として『日本哲学史研究』2022年度版19号にオンライン掲載される予定であることをお断りする。本稿はこれを、本編著の意図に沿って増補した。以下、原則として、インゴルドを「原著者」とし、稲賀を「編者」と表記する。
- (2) 東洋哲学を専攻する小倉紀蔵は近著『弱いニーチェ—ニヒリズムからアニマシーへ』（ちくま選書、2022年、158-9頁）で、筆者の「蜘蛛の巣」構想に言及し、それを松島健『プシコナウティカ psico-nautica—イタリア精神医療の人類学』（世界思想社、2014年）に依拠しつつ、ティム・インゴルドの仕事の近傍に位置づけ、小倉自身の「アニマシズム」へと架橋している。本章は、この小倉の貴重な指摘への筆者からの補遺となる。また筆者の松島の仕事への評価の一斑は、「触れること・触れられること・擦ること：「中動態」から社会正義の根幹を問い直す(3)』『図書新聞』3314号（連載178）、2017年8月5日を参照されたい。こうした意想不到的「錯綜」や「交通」が「蜘蛛の巣」の生態の「生きた比喩」*métaphore vive*-Paul Ricoeur をなすことについては、拙稿「九鬼周造と輪廻転生—両大戦間の知的環境における「時間論」の位置」吉永進一、岡本佳子、莊千慧編著『神智学とアジア 西からきた〈東洋〉』青弓社、2022年8月29日、206-225頁、とりわけ「生きた隠喩」（208頁）、「交通」（216頁）を参照されたい。
- (3) Alfred Gell の遺著 *Art and Agency*, Oxford U.P. 1998は、その一貫した記述の体系性と理論構築および作品分析の鋭さにおいて歴史に残る名著であり、従来の「藝術」理念を一新している。ただ理論的前提としての *agency* の定義は、あくまで欧米の学術側に内在する問題を克服するために必要な道具立てで、本論の立場からいえば特殊なひとつの「蜘蛛の巣」の布置および理解に他ならず、以下ではジェルが *agency* 概念により乗り越えようとした方法的な困難を、別の方向から克服することを試みる。本稿末尾を参照されたい。なお Gell の本書への筆者の称賛を交えた詳細な分析と評価とは、場所を改め、Hans Belting, *Bild-Anthropologie*, München, Wllhelm Fink Verlag, 2001; ハンス・ベルティン『イメージ人類学』仲間裕子訳、平凡社、2014年及び Carlo Severi, *Il percorso e la voce*, Torino, Giulio Einaudi, 2004; カルロ・セヴェーリ『キマイラの原理』水野千依訳、白水社、2017年への考察をも交えつつ、別途の機会に展開したい。その発端に過ぎないが、以下参照：稲賀繁美「五感では不可触な領域との接触を、いかに物質のうちに定位するか？ 木俣元一・佐々木重洋・水野千依（編）『聖性の物質性—人類学と美術史の交わる場所』(三元社)を Alfred Gell, *Art and Agency, An Anthropological Theory* (Oxford University Press, 1998) ほかと交差させて読む』『図書新聞』3567号8面、2022年11月19日付。またこの間、筆者が見落としていた論文集、古谷嘉章・関雄二・佐々木重洋（編）『「物質性」の人類学—世界は物質の流れの中にある—』同成社、2017年のご恵投を得た。本来なら本稿に盛り込むべき知見や検討すべき論点を多く含み、筆者として応答すべき案件も多いが、注記のみに留め、「web 擦り合わせ」には他日を期したい。
- (4) Shigemi Inaga, “Kegon/Huayan 華嚴 View and Contemporary East Asian Art: A Methodological Proposal,” *Cross Sections* vol. 5, The National Museum of Modern Art, Kyoto, March 20, 2013, pp.2-25. 韓国語版は、稲賀繁美 “Kegon/ Huayan 華嚴 View and Contemporary East Asian Art: A Methodological Proposal,” 洪善杓先生研究三十周年記念論『홍선표 편 『동아시아 미술의 근대와 근대성 / 東アジア美術のモダンとモダンティ—/ 東亞美術の近代と近代性』 서울, 학고재, 2009, pp. 221-250.
- (5) Shigemi Inaga, “Ikanobori et tako dans la littérature haikai et les arts plastiques--sonde fantôme entre le passé et le présent, la terre et le ciel,” in Cécile Laly (éd.), *Cerfs-volant du Japon, à la croisée des arts*, Nouvelles Éditions Scala, 2021, pp. 38-45.
- (6) 稲賀繁美「メディア的身体に向けて：「お稽古事」大衆文化における「身体と感性」』『赤門合気道』令和3年度、第62号、東京大学合気道部赤門合気道倶楽部、2021年12月11日、68-75頁。本稿はフランス語未刊原稿の自由な日本語訳。フランス語原文は2019年に執筆だが、現在なお版元で刊行準備中。

- (7) 稲賀繁美「マルセル・グリオーールとアマドゥ・ハムパテ・バとのあいだ：可視の知識と不可視の知恵と」『ARGO XVII Invisible』（アルゴ17号）、東京大学教養学部フランス分科アルゴ編集委員会、2006年4月1日、257-263頁。
- (8) Shigemi Inaga, “Is Art History Globalizable? A Critical Commentary from a Far Eastern Point of View,” ed. James Elkins, *Is Art History Global?*, 2007, New York: Routledge, pp.249-279, 384-90.
- (9) 稲賀繁美「解説 歴史哲学としての『中國書史』—その「詩想」の「うつわ」と「うつし」 石川九揚著作集 別巻II『中國書史』2017年5月9日、899-903頁。および、Shigemi Inaga, “Utsushi and Utsuroi: Imprint and Transience,” Magdalena Durda-Dmitruk, ed., *Poland-Japan. Contemporary Art and Artistic Relations*, World Art Studies & Tako Publishing House, Warsaw-Toruń, 2019, pp. 21-27.
- (10) 稲賀繁美「奈落と渦巻」『接触造形論：触れあう魂、紡がれる形』名古屋大学出版会、2016年、第2部第2章、とりわけ186-88頁。本章は国際会議でのフランス語による未刊のコメントに依拠する。
- (11) 以下、引用括弧中、最初の italic は英文原典、Tim Ingold, *Being Alive, Essays on Movement, Knowledge and Description*, London & New York: Routledge, 2022の頁数、通常の算用数字は和訳の該当頁数を記載する。
- (12) Shigemi Inaga, “Yukio Yashiro(1890-1975) between the East and the West in Search of an Aesthetic Dialogue,” in Krystyna Wilkoszewska, ed., *Aesthetics and Cultures*, Universitas, Krakow, 2012, pp. 43-59. Shigemi Inaga, „Weg (Dō) – Rahmenlosigkeit – Verlauf: Eine Reflexion auf ‚Japanisches‘ in der Kunst.“ In: Yasuhiro Sakamoto, Felix Jäger, Jun Tanaka (Hrsg.): *Bilder Als Denkformen: Bildwissenschaftliche Dialoge Zwischen Japan Und Deutschland*. Berlin: De Gruyter, 22.Juni.2020, pp. 127-144. 岡倉覚三『茶の本』の道徳経英訳については “Kuki Shūzō and the Idea of Metempsychosis: Recontextualizing Kuki’s Lecture on Time in the Intellectual Milieu Between the Two World Wars,” *Japan Review*, no. 31, International Research Center for Japanese Studies, 2017, pp. 105-122.
- (13) 小泉八雲こと Lafcadio Hearn が愛したこの朝露の水滴の比喩については、稲賀繁美（編）『映しと移ろい：文化伝播の器と蝕変の実相』花鳥社、2019年、冒頭/扉裏の注記を参照されたい。
- (14) 大気圏の対流については、前掲拙著『接触造形論』138-141頁。地学的想像力も含め『絵画の臨界』名古屋大学出版会、2014年のプロローグで提唱。その意味は本稿の「5」の末尾にささか敷衍する。
- (15) Shigemi Inaga, “A ‘Pirates’ View’ of Art History,” *Review of Japanese Culture and Society*, vol. XXVI, Josai University, December 2014, pp. 65-79. Shigemi Inaga (ed.), *A Pirate’s View of World History — A Reversed Perception of the Order of Things From a Global Perspective*, The 50th International Research Symposium 第50回国際研究集会, International Research Center for Japanese Studies 国際日本文化研究センター, 2017. および稲賀繁美（編）『海賊史観からみた世界史の再構築：交易と情報流通の現在を問い直す』思文閣出版、2017年。
- (16) Shigemi Inaga 前掲（注4）“Kegon/Huayan 華嚴 View and Contemporary East Asian Art: 冒頭注参照, pp. 18-20.
- (17) 稲賀繁美「感情移入と気韻生動とのあいだ——発散と収束：重訳の重量と訳し戻しの逸脱とのあいだ」*Around Einfühlung und Qiyun Shendong* 『比較文学研究』107号、2022年1月20日、34-51頁；pp. 2-3. なおその原型となった英語論文の発展形は Shigemi Inaga, “Classical Chinese Aesthetic Ideals meet the West: Modern Japanese Art as a Contact Zone,” *Japan Review* 37 (2022): 7–28 (in print) として刊行予定。
- (18) 稲賀によるフルッサー批判は、モノ学・感覚価値研究会アート分科会編『物気色 (MONOKEIRO)』美学出版：日英語併記、2010年12月1日に収録の論考：「モノの気色：物質性より立ち昇る精神の様相」“Spirits (Keshiki) Emanating from Objecthood (Mono): Or the Destiny of the In-formed Materiality,” 64-82頁。
- (19) 評者による「工藝」復権の提唱は、前掲『接触造形論』第3部第5章および『伝統工藝再考』思文閣出版、2007年。国際学会での英語基調講演としては “Toward a Social Design in the Era of globalization: A New Task of the Design History,” ICDHS (The International Conference on Design History and Design Studies), Department of Industrial

- and Commercial Design, National Taiwan University of Science and Technology, Taipei, Taiwan, October 26-28, 2016.
- (20) 稲賀繁美「マイケル・ボランニーのことなど」麗澤大学比較文明研究センター編『伊東俊太郎博士古稀記念文集』行人社、2000年、192-195頁。
- (21) この場では意を尽くさないが、以下の拙文書評を参照されたい。「収斂と発散、反転する「阿界曼荼羅」：「阿頼耶識」「如来蔵」から発芽する霊性——安藤礼二著『熊楠——生命と霊性』(河出書房新社)を読む」『図書新聞』3494号(連載216)、2021年5月1日；「二而不二(ニフニ)」と「豪猪(ヤマアラシ)のジレンマ」土宜法龍(とき・ほうりゅう)という産婆が孵化させた熊楠曼荼羅の舞台裏——小田龍哉著『ニフニ——南方熊楠と土宜法龍の複数論思考』(左右社)を読む」『図書新聞』3500号(連載218)、2021年6月19日。
- (22) 前掲(注5) Shigemi Inaga, “Ikanobori et tako…” 参照。および公開講演：「稽古論」第69回日文哲学術講演会、国際日本文化研究センター、2022年1月7日。なお、関連する論考を筆者は以下として口頭発表している。Shigemi Inaga, “Corps médial dans la pratique des arts martiaux au Japon ; Un autre sixième art ou une facette ignorée du Néo-japonisme ? » *conférence internationale au Collège de France, « Néo-japonisme 1945-1975 », Paris, 12-13 mai, 2022*. 本会議の筆者による参加記録は現時点では非公開だが、概要は以下：稲賀繁美「ネオ・ジャポニスムの可能性——相互変容の循環とその空際とに、多文化交渉の無何有郷を探る」『図書新聞』3558号(連載233)、2022年9月10日、8面。
- (23) 評者による同様の問題意識への言及は：Shigemi Inaga, “Cultural Gap, Mental Crevice, and Creative Imagination: Vision, Analogy, and Memory in Cross-Cultural Chiasms,” *Journal of Aesthetics and Phenomenology*, London: Routledge, 9 Jun 2020, Published online, 18pp. および「超越視覚文化的觸覚感知：重新定義博物館學的數位化的全球尺度模型 Haptic Sensations Beyond Visual Culture: Redefining “Modernity,” in *Museology so as to Readjust the Digitized Global Scale Model*」『現代美術 Modern Art』北雙特刊 *Taipei Biennial 2016* 第183号、中華民國105年、季刊・12月出版、臺北市立美術館発行、2016年12月、62-75頁。
- (24) Shigemi Inaga, “Japanese Philosophers Go West: The Effect of Maritime Trips on Philosophy in Japan with Special Reference to the Case of Watsuji Tetsurō (1889-1960),” *Japan Review*, no. 25, 2013, pp. 113-144.
- (25) 理論化傾向に伴う次元の縮減と座標軸の限定が孕む危険については、稲賀繁美「知性の再定義に向けて：理論的還元の限界と、全体論的把握への誘惑のはざままで」『視覚の現場：四季の綻び』Vol. 2、靨齋書房、2009年8月21日、35-37頁。
- (26) Tsudzumi Tsunejoshi, »Rahmenlosigkeit des japanischen Kunststils«, *Zeitschrift für Ästhetik und Allgemeine Kunstwissenschaft*, 22/1, 1928, SS. 46-60. 金田晉「額縁の構造」『美学』112号、197；小田部胤久「鼓常良と無極性の美学」『美学芸術学研究』25、東京大学、美学芸術学教室、2008、185-6頁、および稲賀繁美「藝術という名の「枠組み」を問い直す：鼓常良 Rahmenlosigkeit 再考」『あいだ』第165号、2009年10月20日、34-40頁。
- (27) 「テーセウス・コンプレックス」とも呼ばれる永続性の幻想とその代替としての「造替」が孕む、主意的な歴史抹消による無名性の獲得と、永劫帰帰の政治学の巧緻については、Shigemi Inaga, «La vie transitoire des formes-Un patrimoine culturel à l'état d'eidos flottant», *Le Sanctuaire d'Ise : Récit de la 62^e Reconstruction*, Sous la direction de Jean-Sébastien Cluzel et Nishida Masatsugu, Mardaga, 2015, pp. 145-155. なお、日本の絵巻物やインドのアジャンター遺跡壁画を根拠に、東洋に「枠組み」の欠如を指摘したマルローの見解については、稲賀繁美「マルローと世界美術史の構想」、永井敦子・畑 亜弥子・吉澤英樹・吉村和明(共編)『アンドロ・マルローと現代—ポストヒューマンズ時代の〈希望〉の再生—』上智大学出版、2021年、271-273頁。
- (28) 工藝的な職人仕事と、植民地行政との軋轢、価値観の相克が含む思想問題については、Shigemi Inaga, “A.K. Coomaraswamy and Japan: A Tentative Overview,” Madhu Bhalla, ed., *Culture as Power: Buddhist Heritage and the Indo-Japanese Dialogue*, Routledge India, India, 2021, pp. 109-131.
- (29) その簡略な見取り図としては、稲賀繁美「書評」『イメージはいかにして生まれ、伝播し、体験されるのか：20世紀の知的精神史の生態を骨太な輪郭で縦横に描く：ジョルジュ・ディディエューベルマン著『残存するイメージ：アビ・ヴァールブルグによる美術

- 史と幽霊たちの時間』『図書新聞』2789号、2006年9月9日。
- (30) 「同一性」に付いての素朴な思い込みの問い直しについては、稲賀「『あいだ』の哲学に向けて：人文知の再定義と復権のために 藝術行為再考に向けた、暫定的な覚え書き(上)」『あいだ』第255号、2020年9月20日、12-21頁、以下(中)第256号、2020年11月20日、28-35頁。(下)第257号、2021年3月20日28-33頁参照。および、Shigemi Inaga, “Kuki Shūzō and the Idea of Metempsychosis: Recontextualizing Kuki’s Lecture on Time in the Intellectual Milieu Between the Two World Wars,” *Japan Review*, no. 31, International Research Center for Japanese Studies, 2017, pp. 105-122.
- (31) 出口顕「イメージと規律=訓練」、木俣元一・佐々木重洋・水野千依(編)『聖性の物質聖：人類学と美術史の交わる場所』三元社、2022年、182-3頁。同、佐々木重洋「基調論文」43-44、53-54頁。
- (32) なお、ここで詳述は避けるが、網目構造にあつては、その実体的な連結組織ではなく、その間隙に生じる「隙間」の機能が無視できない。むしろその「篩(ふるい)」の網目、「穴(ざる)」構造の選択透過性こそが問題となる。稲賀「『器と中身』モデルから布状組織による転写モデルへ——知識の移転をめぐる異分野交流の実験より——ゲッティンゲン会議から(3)」『図書新聞』3230号(連載157)、2015年11月14日、および稲賀編『映しと移ろい』前掲、第2部及びその冒頭129頁。ここで例としてピーヴァーのダムに言及したが、詳しくは、一般向きの著書だが、Ben Goldfarb, *Eager, The Surprising Secret Life of Beavers and Why They Matter*, ベン・ゴールドファーブ『ビーバー』木高恵子訳、草思社、2022年参照。より専門的な物性・化学的解釈については、拙稿「Genèse et préhistoire des écosystèmes : « l'être vers la vie » géologique et « le milieu » proto-biologique», 2018, Paris, Hermann, pp. 265-273, p.380.
- (33) 稲賀繁美「書評 鈴木貞美『歴史と生命 西田幾多郎の苦闘』作品社、2020年3月15日刊」『日本哲学史研究』第17号、2021年3月25日、93-103頁。
- (34) 「粘菌」モデルの考察は、稲賀前掲「『あいだ』の哲学に向けて：人文知の再定義と復権のために 藝術行為再考に向けた、暫定的な覚え書き(上)」『あいだ』第255号、2020年9月20日、12-21頁。およびホルスト・ブレードカンプとの突き合わせは、Shigemi Inaga, „Weg (Dō) – Rahmenlosigkeit – Verlauf: Eine Reflexion auf ‚Japanisches‘ in der Kunst.“ In: Yasuhiro Sakamoto, Felix Jäger, Jun Tanaka (Hrsg.): *Bilder Als Denkformen: Bildwissenschaftliche Dialoge Zwischen Japan Und Deutschland*. Berlin: De Gruyter, 22.Juni.2020, SS. 127-144 たりわけ SS. 284-5.
- (35) Walter R. Tschinkel, *Ant Architecture: The Wonder, Beauty and Sciences of Underground Nets*, Princeton University Press, 2021. ウォルター・R・チンケル『アリたちの美しい建築』西尾義人訳、青土社、2022年。
- (36) 一般向きに好評を博した著書として、中田兼介『クモのイト』ミシマ社、2019年、第八章参照。
- (37) 稲賀「蜘蛛の巣としての電子テキスト—その来歴と現在」Edoardo Gerlini, 河野貴美子編『古典は遺産か？ 日本文学におけるテキスト遺産の利用と再創造』アジア遊学261、勉誠出版、2021年10月、208-219頁。なお本書序論注11も参照。
- (38) この点でカフカの創作を起点とする西成彦「断食芸人論」『エクストラテリトリアル Extraterritorial 移動文学論II』作品社、2008年に展開される「蜘蛛の巣」を巡る卓抜な議論、捕食者の側の所有権に拘泥する片務性を、蜘蛛の餌食となる蛾の体験から問い直す「学者犬」批判を参照されたい(292-295頁)(第IV部扉裏に抜粋を引用)。
- (39) 「分解」が昨今の学術における鍵言葉となっている。若干の例に留めるが、藤原辰史『分解の哲学 腐敗と発行をめぐる考察』青土社、2019年。マリー・シェルドレイク『菌類が世界を救う』(原題：Entangled Life, How Fungi Make Our Worlds, Change Our Minds & Shape Our Futures)、鍛原多恵子訳、河出書房新社、2022年。また文化領域での発言だが、平田オリザ『下り坂をそろそろと下る』講談社現代新書、2016年が話題を呼び、稲垣論「絶滅へようこそ」晶文社、2022年が目目を浴びる状況も、人類史の生態論的な解過程の顕著な兆候として、本稿との関係でも無視できない。なお、この問題系を「レンマ」と接続する試みとして、山内得立の没後出版『睡眠の哲学』(岩波書店、1993年、燈影社、2002年)への論及が必要だが、場所を改めたい。

- (40) インゴルドの議論との関係で、國分功一郎『中動態の世界—意志と責任の考古学』（医学書院、2017年）と小坂井敏晶『増補 責任という虚構』（ちくま学芸文庫、2020年）との論争に架橋する試みとして、稲賀「意志的主体による責任」という〈虚構の必要悪〉：「中動態」から社会正義の根幹を問い直す（上）」『図書新聞』3308号（連載176）、2017年6月24日、以下（中）3309号（連載177）、2017年7月1日、（下）3314号（連載178）、2017年8月5日を参照。また中動態的機制が無名性による権威を獲得する過程については、「タケミカヅチはなぜタケミナカタに自らの手を握らせたのか?：『古事記』「国譲り」の発話構造における神威発現の機制と策略」『図書新聞』3354号（連載185）、2018年6月9日、および「『のっぺらぼう』への誘惑：集合霊の憑依と無名性への夢」『図書』12月号（岩波書店、2019年12月1日）18-23頁。なお冒頭注記のとおり、本稿は『日本哲学研究』誌19号2022年に掲載予定の書評「『人類学的思考』と『東洋/日本哲学』との斬り結びの可能性にむけて」に本書の意図にそって増補・加筆したものであることを、お断りする。ご理解を賜った同誌編集部および上原麻有子先生に深謝申し上げる。



[カヴァーおよび扉]

作品提供：君島彩子 © 君島彩子 2022

[見返し型紙]

Tuer, Andrew White, The book of delightful and strange designs;
being one hundred facsimile illustrations of the art of the Japanese stencil-cutter,
London, The Leadenhall press, ltd., 1893

© 京都服飾文化研究財団

【日文研・共同研究報告書 186】

蜘蛛の巣上の無明
インターネット時代の身心知の刷新にむけて
二〇二三年二月二十八日 初版第一刷発行

編者……………稲賀繁美
装幀……………山元伸子
発行者……………橋本孝
発行所……………株式会社花鳥社
……………<https://kachosha.com/>
〒五三二〇〇六四 東京都目黒区下目黒四一十八四〇
電話〇三六三〇三二二五〇五
ファクス〇三三七九二二二二二
ISBN978-4-909832-72-6 著作権は、各執筆者にあります。

組版……………キヤップス
印刷・製本……………**太平印刷社**
乱丁本・落丁本はお取り替えいたしません。

【編者紹介】

稲賀繁美(いなが しげみ)

京都精華大学国際文化学部、初代学部長を経て特任教授

1957年東京生まれ、広島育ち。東京大学大学院比較文学比較文化専攻単位取得退学・パリ第7大学博士課程修了。三重大学助教授を経て、国際日本文化研究センター・総合研究大学院大学・助教授・教授を経て、2021年より名誉教授。放送大学客員教授。専門は比較文学・比較文化、文化交渉史。主要著書に『絵画の黄昏 エドゥアール・マネ没後の闘争』(1997)『絵画の東方 オリエンタリズムからジャポニスムへ』(1999)『絵画の臨界 近代東アジア美術史の桎梏と命運』(2014)3部作のほか『接触造形論 触れ合う魂 紡がれる形』(2016: いずれも名古屋大学出版会)など。主な日本語編著に『異文化理解の倫理にむけて』(名古屋大学出版会、2000)、『伝統工藝再考』(思文閣出版、2007)、『東洋意識』(ミネルヴァ書房、2012)、『海賊史観からみた世界史の再構築』(思文閣出版、2017)、『映しと移ろい: 文化伝播の器と蝕変の実相』(花鳥社、2019)。仏文共編著に *Vocabulaire de la spatialité japonaise* (CNRS Éditions, 2014)。近著に『矢代幸雄』(ミネルヴァ書房、2022)。放送大学印刷教材として『日本美術史の近代とその外部』(放送大学教育振興会、2018)。ジャポネズリー学会賞、サントリー学芸賞、澁澤クローデル賞特別賞、倫雅美術奨励賞、和辻哲郎文化賞、フランス建築アカデミー出版賞など受賞。

業績検索：<https://inagashigemi.jp.org>

INAGA Shigemi is a specially appointed professor at the Kyoto Seika University, visiting professor at the Open University Japan, professor emeritus both at the International Research Center for Japanese Studies, and at the Post-Graduate University for Advanced Studies (Sokendai). His main publications include *Crépuscule de la peinture* (1997), *L'Orient de la peinture* (1999), *Images on the Edge* (2014) as well as *In Search of Haptic Plasticity* (2016; all from the University of Nagoya Press). His most recent book is a critical biography *Yashiro Yukio* (2021, Editions Minerva). Editor of numerous proceedings in the *Nichibunken International Symposium Series*, he is also co-editor of *Vocabulaire de la spatialité japonaise* (2014, CNRS Éditions). He is recipient of Suntory Prize for Academic Achievement, Ringa Art Incentive Award, Special Award, Shibusawa-Claudet Prize, Watsuji Tetsurō Cultural Award and laureate of the Prix de la publication de l'Académie de l'architecture. His main academic papers are accessible: <https://inagashigemi.jp.org/>